
エウロパの時間

冴木よしえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エウロパの時間

【EZコード】

N6743A

【作者名】

冴木よしえ

【あらすじ】

22世紀の地球。地球上の温度の上昇により、他の星に移り住むようになった人類。アンダーグラウンドエイジアという地球上の企業が、木星の衛星「ガニメデ」で人類が住めるように開発を進めていた。ガニメデへの飛行を迎えた新人6人。そして、彼らに待ち受けっていた重なるトラブルと迫られる選択。それは、21世紀から回り始めていた悲しい運命の歯車。あなたは、遠い未来に生きてまで、長生きしたいですか？

「コンクリートの熱を背中に感じていた。視界には、聳え立つロケットと、青い空。久しぶりに地上に出てきたら、猛烈な太陽が出迎えてくれた。

明日にはあの白いロケットに乗り、エウロパまで探査に出る。この青い空、灼熱の太陽とはもう会えないような気がした。不快に思うこの熱い空気も日光も、身体全身で感じておきたい。

青年は、コンクリートに手足を投げ出し、仰向けに横たわっていた。足元には、もう一人青年が座っていた。明日、一緒に飛び立つ者だった。

「絶対、地球に帰つて来よう」
足元から聞こえる声に、ぼんやりと頷く。

百年以上に渡る物語の歯車は、ここから回り始めていた。

二十一世紀終盤。まだ人工大気圏が完成していない氷の星エウロパでは、コロニー内で宇宙開発が行われていた。その中でも一番大きなコロニーの中では、秘密裏にある作業が行われていた。白い蒸気の立ち上る円柱の透明な容器から、無数のケーブルが延びている。高さ二メートル、直径六十センチのその円柱の中には、一人の人が眠りにつこうとしていた。

「四十年後、また会おう」

震える指でスイッチを押すと、透明な容器の表面はみるみる白くなり、中の人間が確認できないほどに不透明になった。円柱の容器の前には、銀色のプレートが貼られていた。

『未来の科学者に託す 現代の最高の頭脳 ここに眠る』

朽ちたコンクリートの塊に、容赦なく太陽光が照り付けていた。ここは日本という国の大都会といつ街だった所。水深五メートルの海水からコンクリートが生えている。二十世紀に「都庁」と呼ばれたコンクリートの塊が、大きな作業用のロボットによつて、壊された。辺りには同じようなコンクリートの塊が多数存在する。無論、どれも機能はしていない。

二十世紀に温暖化現象が問題になつてゐたそうだが、二十一世紀が終わる頃には、地球上で暮らせるような状態ではなかつた。赤道直下での温度は常に六十度。北極点、南極点でも四十度を越す温度を記録していた。高温によつて溶け出した、北極、南極の氷は、大量の水となつて地球上を覆い、二十世紀に栄えた都市をすべて飲み込んだ。が、人類は二十一世紀半ばから、居住地を地下や、標高の高い場所へと移し、人類絶滅の危機から逃れた。しかし、そんな場所にも限界があり、人類は新たな拠点に向けて準備を始めた。

そして、二十二世紀を迎えた今、人類は「地球地下」「火星」に住むようになり、近年新たに、木星の衛星「ガニメデ」「エウロパ」への移住計画が進んでいた。

ガニメデの開発に携つてゐる「アンダーグラウンドエイジア」では、科学者、技術者たちが、次の飛行の準備をしていた。ガニメデの人工大気圏は完成しており、これからは滞在テストなどが繰り返される。

翌々日に控えたガニメデへの飛行は、新人六人で行うことになつていた。初飛行となる六人は、綿密なスケジュールのもと、飛行テストや体調管理を行つていた。その中の女性一人がオレンジ色の恒温服に身を包み、灼熱の地上で散歩していた。恒温服は、五十度を超える太陽光を浴びても身体の表面温度を二十五度に保つアンダーグラウンドエイジアで開発された地上用の服である。

「この服ね、髪の毛がペシャつてなるから、ヤなの！」

小さいほつの女性が頭を覆っている透明な部分をコツコツと叩く。「仕方ないじゃない。それ取つたら、髪がペシヤつてなるどころか、燃えてなくなるよ」

「頭の部分には、涼しい風が流れるように作ってくれればいいの」

「ウサが開発すればいいじゃん? 女性にウケるよ、きっと」

ウサと呼ばれた小さな女性は、頬を思いつきり膨らまして足を踏み鳴らした。四、五歳の子供がやるような仕草である。

「やだもん! ウサはコンピュータしか扱えないもん。あ、開発室にお友達のおじさんが出るから、お願いしてみようかな。ヒロミは、これから何処行く? ウサは開発室に行つて来る!」

「いいよ。行つておいで。私は、一回部屋に戻つてから食堂に行くよ」

ウサはひらひらと手を振つて、アンダーグラウンドエイジアのメインビルに走つて行つた。

「あれで、二十四歳だもんね。世も末だよ、ホント」

ヒロミのつぶやきは、もちろんウサには届かなかった。

メインビルに入ったウサは、突然腕を引っ張られて受付の方に引き寄せられた。

「なにつ! なにつ?」

「僕だよ僕! シゲだよ。静かにして。なんかね、ロビーのソファーの方で不審な話し声がするからさ。クボがソファで寝てるんだよね。大丈夫かな?」

「じゃ、助けに行かなきや!」

ウサはシゲの手を振り解いて、ソファの方に走つていった。

「クボ! クボクボ! 大丈夫?」

クボに近づいたウサは、肩を掴んで揺すつて起こした。

「え、何？　あ…ウサ？　うん、何？」

首をしきりに搔きながら、クボは立ち上がった。

「シゲがね、ここで変な声聞いたって。大丈夫だつた？」

口をパクパク動かしながら、三十センチも大きなクボを見上げて、ウサが心配そうに眉を寄せている。

「ねえ？　大丈夫？」

「え？　あ、うん…。シゲもいるの？」

少し汗を滲ませて辺りを見回した。手は首の後ろを押さえたままである。視線を受付に動かした時に、パーティションの後ろからシゲが顔を出した。

「今、言い争うよつな声がしたんだが
　クボとシゲが辺りを見回しても、辺りには三人以外にはいなかつた。

「変だね。クボ独り言言つてたの？」

ウサは、手首にある黄色いボタンを押した。音も無く、頭を覆つていた透明のカバーが襟元に格納される。そして、ソファに座りながら言つた。

「なんか気持ち悪いなあ。クボ、何も見なかつたの？」

クボが煙草を胸ポケットから出しながら、また首を搔いた。

「虫にでも刺されたのか？」

シゲがその様子を見ながら聞いた。

「いや、ちょっと痒いだけ。膨れてないし」

「何かに感染でもしたら、出発できないからな。お前じゃなくて、補欠クルーが一緒なんて御免だから」

「ああ、注意するよ」

「あー！」

その時、ウサが突然大きな声を出して立ち上がった。

「忘れてた」

ウサが身軽に、ジャンプしてソファの後ろに着地すると、北棟に向かって走り出した。

「ウサ、どうした？」

クボが大声で聞いた。しかし、ウサは振り返りもせず、足を止めることがない。

「開発室に行くの！」

その後のウサの声は、ロビーまで届かなかった。

光の届かない北棟は、開発や保存に適しているので、研究室、開発室、訓練室として使われている棟である。湿度、温度とも一定に保たれ、窓がないストレスを感じさせない。一方、南棟は、技術者、研究者、クルーの居住スペースとなっている。透明な窓は過剰な太陽光に含まれる紫外線、赤外線、宇宙線をカットし、程よい光を室内に送り込む。もちろん開放はできない。そして西の玄関からまっすぐに伸びた東棟は、幹部用の個室と数多くのシーケレットルームで成り立っている。通常、東棟への通路は閉ざされていて、カードキーを持った者しか出入りができない。長年ここにいる者でも、シーケレットルームに何があるのか、知る者は少ない。

ウサは北棟に入つてすぐ左手にあるエレベータに乗り込んだ。開発室は北棟の地下一階にある。上に向かつて重力を感じると、すぐにエレベータは止まった。エレベータの向かいが目的の部屋である。このフロアにある九部屋はすべて開発室である。それぞれの部屋に二、三人ずつ入り、宇宙生活に必要な物を開発している。今、ウサが着用しているこの恒温服もここで開発された。

「ねえ！ ヒルさんいる？」

ウサは、開発室の扉をノックもせずに開けた。目の前には、色の白いおじさんと少し背の高い青年がコーヒーを片手に、話をしながら部屋を往復してた。

「ウサちゃん。前に部屋に入るときはノックして入つてって言ったでしょ？」

「ん、そうだっけ？ あ、あのね、この恒温服の開発チームに、ヒルさん入つてたよね？」

「ただけど？」

ウサの話を聞かない性格に慣れているのか、ヒルと呼ばれた色の白い男性は、目を細めて首を傾げた。

「これね、長時間着てると髪がペシャつてなるのね。だから、改造して。」

ヒルは、「コーヒーを一口口に含むと、にやりと笑った。背の高い青年、ユウセイもくすくす笑った。

「あのね、ウサちゃん。今、人間は地上では生活できないの。移動は、遮光車か、地下通路。どうしてもって場合のために開発したんだよ。長時間着用するよつには作っていられないんだから」

「でも、ウサ、外で遊びたいもん」

「たとえ恒温服を着てても、日光は有害だからね」

「や、作って」

口を真一文字に結んで、ヒルの服の裾を引っ張った。頑固なウサは、じうなつてしまつては一步も引かないことをヒルは知っていた。

「はいはい。じゃ、考えておくよ。大量生産はできないよ。長時間地上にいるのを推奨するわけにはいかないからね」

「やつた！ ありがとう。試作品ができたら、ウサに最初に連絡ちようだいね」

「ウサちゃん。自分でもそういうのを開発できるくらい優秀な頭脳を持つてるんでしょ？ 通信なんかにいないで、開発に来たら？ 歓迎するよ」

横で話を聞いていたユウセイが、にこにこしながらウサに近づいた。

「随分前にも一回誘つたよね？ どうして来ないの？ シャトルなんて危ないし。それに、ウサちゃんの素晴らしい能力があんまり幹部に知られると、東棟に隔離され、ずっと研究をしなきゃいけなくなるかもよ？」

ウサは、ブスッとした表情で首を振った。

「イヤ。ウサは、コンピュータが好きだもん。開発はヒルさんに任せなの。ウサはマサトとタカと飛びたいの…」

ウサはヒルの飲んでいたコーヒーを横から取り、飲み干してから

部屋から出て行つた。残されたヒルは、手渡された空になつたカツプをぼんやりと眺め、ため息をつく。その横で、コウセイはウサの消えた扉を冷たい視線でじつと見つめていた。

マサトはシャトル発射場から、遮光車でアンダーグラウンドハイジアに向かつていた。横には、タカが乗つている。

「今晚、最後の身体検査つすよね？」

「ああ。いよいよ出発か」

一日後に飛行を控えた六人は、今晚身体検査をして、明日は最後の合同訓練。そして、二日後に飛び立つのだ。そんな中、今日の訓練を終えた機関士のマサトは、副機長のタカとともに、整備の具合を見に行つていたのだ。

「クボも、俺たちが来る前までシャトル発射場に居たらしいんですよ。ここに来る前にロビーですれ違つたんすけど」

マサトは今日、北棟の訓練室で機器の整備方法の確認とシャトルの動力室のレプリカで作業訓練をしていた。訓練終了後にタカとロビーで待ち合わせしていたのでロビーに出て行つたら、丁度駐車場からクボが出てきたのだ。

「何をしていたんだろうな。俺たちが今日ここに来るとは言つてたんだから、一緒に行つたつて良かつたのに」

「そうつすよね？ 俺もそう思つて、そり言つたんすけど、言葉濁してどつか消えちゃつたんすよ」

「へえ。珍しいな」

タカは、少し背もたれを倒して伸びをした。クボの様子を特別気にするでもなく、別のことを考えていた。

「腹減つたなあ。今日は何を食つかな

「今日から、ビールは駄目つすよ」

「解つてるよ。もう出発一日前だからなー。でも一杯だけ

」

「駄目です！ シゲに言いますよ！」

「シゲも飲みたいはずだよ。筋トレの後は必ずビール飲んでるんだから」

マサトは溜息をついて、ワインカーを出した。左折して、アンダーグラウンドエイジアの敷地内に入る。マサトは、正門の警備の人へ軽く挨拶をして、駐車棟の扉を開けてもらつた。そして、右折しコンクリートの建物に入った。駐車棟には、十一台駐車できる。空いているスペースは一つしかなかつた。目視で確認し終えた頃、後ろで扉の閉まる音がした。

「今日は、車の返却がみんな早いっすねー」

「お前がバッテリーを上げなきや、俺たちももつと早く帰れただろーが」

そういうて、タカがマサトの頭を小突いた。

「だつて、すぐ帰ると思つて、オンにしといたんすよ。あんなに長く居た、タカが悪いんじや」

「電気で走る車なんだから、バッテリーは大事にしろよな！ 常識だろーが」

「ひどいっすよー」

口で攻防を繰り返しながら駐車し、車外に出た。ロビーまでの連絡通路は、地下一階にある。階段を下りながら、時計を見ると十七時三十分を過ぎたところだつた。

「身体検査の前に夕食が食べれそうだな。マサトも先に行くか？」
「はい。行きます。あ、その前にウサも誘つていいですか？ 今朝、一緒にタコ飯食べようつて約束したんすよ」

「ああ。構わないけど。ウサから誘われたんだろ？ あいつ、年下のクルーが傍にいて嬉しいんだな、きっと」

タカはロビーの扉を開けて、マサトを先に通した。
「ここでは、俺が最年少ですもんね。つぎがウサか。どうせ女性では一番年下じやん」

「女性ねえ」とタカは苦笑した。

「あーーー！　マサト！」

ちょうどその時、噂の女性が北棟からロビーに入ってきた。

「あ、ウサ。これから食堂に行くけど。今大丈夫？」

「うん。大丈夫。まだ、身体検査までに時間あるよね？」

タカは腕時計を見ると、頷いた。

「ああ。十九時からだからな。まだ食べる時間はあるよ。」

「じゃあ、ウサはマサトとご飯に行つて来るね」

「いや、俺も行くから」

マサトと手をつないで食堂に向かうウサに、タカは苦笑しつつも付いて行つた。

出発を翌日に控えた、最後の合同訓練。

本番さながらに、離陸までの操作、行動の確認を行うのが今日の訓練だった。半日の訓練の後は、自由時間をもらつている。クルーメンバーたちは、その自由時間を心待ちにし、最後の訓練に向かつた。

遮光車で、二台に分かれて発射場まで向かつた。先頭を走る車には、タカ、マサト、ウサ。後ろの車には、シゲ、クボ、ヒロミが乗つていた。明日、初飛行を迎えた六人である。

後ろを走る車は、クボが運転していた。乗車してから約五分。会話も交わされずに、目的地へ向かつていた。しかしシャトルが見え始めた頃、シゲが口を開いた。

「ガニメデと言えばな　俺の親父もここで働いてたんだ」

「え？　そうだつたんだ。今もここにいるの？」

クボが前を向いたまま聞いた。

「いや、死んだんだ。ガニメデで事故に遭つた。その話を聞いたのは、事故の一ヶ月後だつたかな。どうも事故を隠していたみたいで。遺体すら帰つて来なかつた」

クボもヒロミも何と声を掛けていいのか解らず、沈黙が続いた。

「過ぎたことだからな。あまり考えないことにしているんだが。
母親が親父の死のショックから立ち直れなかつたのか、その半年後に死んだ時には、ここを恨んだなあ。でも、結局俺も同じ道を歩んでる。運命かなあ」

「事故の詳細は聞いてないの？」

クボが、スピードを少し落としてシゲの顔を見た。特別、思いつめたような表情はしていなかつた。過去のことと割り切つて前向きに生きているのだろうか。

「教えてなんてくれなかつたよ。もう、知りたいとも思わないしな。何、シャトルを見てちょっと思い出しただけだ。忘れてくれ」

シゲは、照れくさそうに笑つて、もう一度シャトルを見た。

ヒロミは、そんなシゲの表情をじつと見ていた。

一方、前を走る車の中は騒々しかつた。

「今日はね、ウサね、自由時間は電気街にお買い物に行くの。シゲがね、荷物持ちしてくれるって」

「なんだ。そういうことは、シゲじゃなくても、俺がやるつすよ」「えー。だつて、マサトつて細いから重いもの持てなさそう」

「俺だつて、力あるつす！ ほら、筋肉あるし！」

マサトは、長袖のシャツを捲つて、肩の筋肉を出した。

「ほら、ほら！ ね？」

「それくらいなら、ウサにもあるもん！」

「ウサは、女でしょ？ 僕たち男の筋肉とは違つのー。」

「やかましい！ 狹い車で喧嘩すんな！」

タカの一声で静かになつた先頭の車両は、ようやく発射場に到着した。整備班がうろうろする発射場の一角にある事務所の地下に車を停めて、今回の任務の指揮者であるマツのもとへ向かつた。地球

の「コントロールセンターより飛行中のシャトルに指示を出したり、ガニメデ到着後の六人の行動を指揮する役割を担っている。

「」ぐるつ。今回の任務は、ガニメデでの滞在テスト、兼、建物建設に必要になれる資料となる数値を取得して来てもらう。現在向こうにいるクルーと交代する形になる。任務内容はそれぞれ、書類で行き渡つていると思うが。シゲ、質問はないか？」

「はい、特にありません」

マツは頷くと、一呼吸おいて、手元の資料を見た。「」では、本名の名前で呼ばれるのではない。ニックネームのような「コードネームで呼ばれる。

「今日は異例なのだが、全員初飛行となるクルーで構成した。皆、優秀な成績を残したものたちだから大丈夫だろうという判断だ。ま、ず、機長及び建築士として、シゲ」

「了解」

「続いて、副機長及び測量士として、タカ」

「了解しました」

「次に、操縦士及び地質研究者として、マサト」

「了解」

「機関士及び測量士として、クボ」

「了解つす」

「通信士及び電気技術士として、ウサ」

「了解しました」

「衛生士として、ヒロミ」

「はい、了解しました」

全員が神妙な面持ちで返事をする。マツも安心したように、力強く頷き応えた。

「明日の出発までに、緊急事態が起こらない限り、このメンバーで飛んでもらう。では、最後の訓練に向かってくれ」

部屋を出ると、ウサがめずらしく神妙な面持ちで歩いていた。ヒロミがそれに気づくと声をかけた。

「どうしたの、ウサ？」

「正式に任命されちゃったね。電気技術の腕は自信あるよ。でも、通信士として二年ここで訓練してきたけど、大丈夫かなあ？」
「優秀なメンバーで揃えたって言ってたじゃん。大体、ここでの通信科の試験を主席でクリアしたんでしょ？」

「そうだけどさあ

「大丈夫だつて。類まれなる優秀なメンバーが揃ってるんだから！」
ウサはエヘヘと笑つて、「ウサ天才～」と繰り返しながら、シャトルに向かつた。

全員が配置についた。円形のコントロールルームにはクルーの席が六個用意されている。全員が背中向きで円の外側を向く形となり、全員の目の前にはさまざまなパネルがあつた。進行方向に向かつて正面がシゲ。右隣がクボ、その隣にウサ。シゲの左隣にはタカ、その隣にはマサト、その隣にヒロミが配置されていた。

コントロールセンターと通信で打ち合わせをするのは、通信士のウサ、操縦士のクボ、そして機長のシゲがメインとなる。そして、他のものは、機長の指示に従つて動くことになるのだ。

『訓練、訓練。こちらコントロールセンター。機長、そちらの準備は出来たか？』

『訓練、訓練。こちらシャトル。打ち上げ準備完了。クルーも全員配置につきました。』

クボは、チェックリストを確認しながら、シゲに向かつて頷いた。ウサも、通信を確認し、コントロールパネルを操作している。その時、マサトが緊迫した声を発した。

『シゲ！ 本当に打ち上げ態勢に入つてるよー。』

「何だつて？」

「この訓練は、エンジン点火はしないよね？ でも、エンジンに点火されてる…コントロールセンターで何か操作したの？」

「コントロールセンター！ こちらの機関士がエンジン点火を確認。至急確認を頼む！」

『「こちらコントロールセンター。ただ今確認中。』 こちらでは確認できない。発射状態に入っているのか？』

「そうだ。こちらのパネルでは、エンジン点火の表示が出ている。実際、微振動を身体で感じる。どうなってるんだ？」

背中を向けて作業していたマサトが、シゲを振り返った。その顔は、今までに見たこともないような大人の顔をしていた。

「シゲ。あと五分で発射しないと、負担が大きすぎてエンジンが爆発する。もう、エンジンを切ることが不可能だ」

「そんなことがあるのか…。五分つて数字は…」

「信頼できる数字です」

シゲは、隣に座るクボの顔を見た。クボはシゲの口から発せられる言葉を予想して怯えていたようだつた。

「このまま打ち上げをしたら、言つまでもなくお前が操縦することになる。予想外のことも起きると思うが、大丈夫だな？」

「」

「クボ！」

「わかりました」

シゲは勇気付けるようにクボの手を触ると、マサトを振り返った。

「マサト、発射までのコミットは？」

「あと、四分三十秒」

「ウサ、こちらの状態をコントロールセンターに送れ

「はい」

「こちらシャトル。今、こちらのデータをコントロールセンターに送つて。発射までのリミットは四分三十秒。機関士の判断によ

り発射することにする。そちらも、そのつもりで準備してくれ

『こちらコントロールセンター。了解した。通信はこのまま繋いでおくよ。』。発射後こちらから指示を出す』

「カウントダウンは?」

『こちらから、一分後に出す。それまで待機するよ』

「了解」

シゲが振り返ると、五人の視線が自分に注がれていた。シゲは、通信のマイクだけを切り、クルーに語りかけた。

「故障か誤作動からかはわからないが、これから発射する。不安は大きいと思うが、冷静に行動してくれ。約一分後にはカウントダウンが始まる。それまでに現在の状況、装備品の確認など大至急するよに」

機関士のマサトと通信士のウサ、衛生士のヒロミ、操縦士のクボがパネルを操作して次々に確認する。

「燃料は四タンク中一タンクが満タン。酸素も五タンク中三タンクは満タンです」

「通信に異常はありません」

「衛生用品は揃っています。食料は約一週間分」

「飛行プログラムはガーメンテ、に行くプログラムで設定されています」

「今日の午後に全部の装備を整える予定だから、完璧には揃つてないか」

シゲはため息をついてマイクのスイッチを入れた。

「こちらシャトル。現状を把握した。発射と同時に地球帰還用の飛行プログラムの変更データを送つてください」

『こちらコントロールセンター。了解した。今、変更プログラムを作成中だ。完了次第送信する。まもなくカウントダウンに入る。クルーは発射準備に入るよ』

「了解」

シゲは、右隣のクボをもう一度見た。青ざめた顔はしているもの

の、瞳はしつかりしているように見えた。

「まもなくカウントダウンに入る。全員のイヤフォンからカウントダウンが聞こえるだろう。ベルトをしつかり締めて、心の準備をしておくよに！」

そして、左隣の副機長タカを見た。

「タカ、フォローを頼む

「お互い冷静にがんばろう」

全員のイヤフォンにコントロールセンターからの音が入ってきた。

『「いらっしゃ」コントロールセンター。これからカウントダウンを開始する。これは訓練ではない。繰り返す。これは訓練ではない』

全員の頭の中に「訓練ではない」という言葉が繰り返される。

『「いらっしゃ」コントロールセンター。カウントダウンを開始する』

... ten ... nine ... eight ... seven ...
six ...

... five ... four ... three ... two ...
one ... Ignition ... Lift Off!

振動が大きくなり、窓の外には煙が見え始めた。

六人を乗せたシャトルはゆっくりと地上を離れた。

地球を飛び立つてから二十秒後には地球の大気圏を離脱し、見る見る地球が遠くなつていった。開発によりシャトルの速度は速くなつたが、プログラムミスやこんな非常事態の時には、それが裏目に出る。プログラムの変更をしていく間にも、シャトルは遠慮なく進んでいくのである。

機長であるシゲは、シャトルの飛行が安定したのを確認すると、椅子から立ち上がり、ウサの元へ行つた。

「ウサ、まだコントロールセンターから、変更プログラムは届かないのか？」

「うん。まだ届かない。あと、約五分でデータが届かないと、その後、一分間通信不可能の地帯に入るよ」

「それは、向こうでもわかつてはるはずだから、それまでには届くだろう」

「万が一、それまでに届かなかつたら その後、コントロールセンターの通信はできなくなつちやう」

「どういうことだ？」

それまで黙つて会話を聞いていた、副機長のタカが口をはさんで近づいてきた。

「まだ訓練中だつたから、近距離通信用の機材しか積んでないの」「発射前にはわからなかつたのか」

「わからなかつた。発射後、通信速度が遅くなつたから、ひょつとしたらと思つて確認したら 近距離用だつた」

シゲとタカは顔を見合させた。ウサも緊張した面持ちで一人を見上げている。シゲは、座席に戻るとイヤフォンを装着した。

「ウサ、まだ通信は可能なんだな？」

「大丈夫。あと十四分二十秒可能だよ」

「いらっしゃるシャトル。応答願います」

『「じゅうごンントロールセンター。どうぞ』

「シャトルに積んでいる通信が、近距離用のものと判明。十四分十秒後には通信が途切れる。それまでにプログラムを大至急送つてくれ』

『了解。もう少し待つてくれ。それまでには送る』

「この任務の指揮者のマツはいますか?』

『マツだ』

「僕たち 帰れますよね?』

『最善を尽くしている。お前たちは優秀なメンバーだ。自信をもつて行動しろ』

「わかりました』

「通信を一旦切ると、視線を右に動かした。』

「クボ。もう、自動操縦に入つたか?』

「ああ、ガニメデへの自動操縦に入つてる』

「万が一のために、こつちでも変更用の軌道を探しておいてくれ。完成したら、マサトとガニメデのプログラムを停止して、クボが作ったプログラムで帰還できるようにしてくくれ』

「わかった。じゃ、ここを離れて実験室にいるから。ここをよろしく

く

クボは立ち上ると、ぼんやりと窓の外の星を見ながらコントロールルームを出て行つた。

「なんで、こんなことになつたんだろう?』

今まで誰も口にしなかつた疑問をウサが口にした。今までになかつた事故。機械のミスとは考えられなかつた。

「今は、帰ることだけを考えよう。初飛行とはいえ、ここのは六人は優秀な人材が揃つてゐる。絶対不可能ではないからな

マツの言葉が蘇る。きっと、大丈夫。このメンバーなら不可能はないはずだ。

シゲの言葉に少しは元気づけられたのか、ウサは立ち上がつて口

ントロールルームを出て行ったとした。

「ちょっとクボの様子見てくるねー」

扉が自動で開き、ウサを飲み込んで再び閉まった。

「プログラムは間に合うかな?」

タカが、ウサの座っていたところのモニタを見つめる。地上のコントロールセンターからの受信は何もないようだった。

「待たずに、早く軌道修正したほうが良くないか?」

「クボの修正がセンターより早く届いたら、そうするよ」

ウサはすぐに戻ってきて、「クボがんばってた」とだけいい、自分の席に着いてセンターからの受信を待っていた。シゲは、イヤフォンをはずさずに、センターからのアクセスを待っていた。

それから、十分ほど経過して、クボが戻ってきた。片手にプログラムのディスクとプリントアウトした用紙。それに、口にタバコを咥えて、疲れ切ったような表情をしていた。

「クボ、出来たのか?」

「ああ。センターからプログラムは?」

「まだなんだ。あと約三分で通信が途切れるから、センターからのプログラムを待たずにクボのプログラムを使おうか」

シゲがそう提案すると、クボは複雑な表情で頷いた。

「こちらシャトル。コントロールセンター応答願います」

『こちらコントロールセンター。プログラムを送りうつとしているのだが、そちらに接続できない。通信士はいるか?』

「はい。ウサです。こちらからは異常が確認できません。送信は可能です。再度送信願います」

ウサは、モニタを睨みながらキーボードをすばやく速さで叩いていた。

「クボ。そのプログラムを使つことにならうだな。マサトと準備を始めてくれ」

シゲがそう言つと、マサトが走り寄ってきて、クボの持つディス

クを受け取った。

「シゲ。間もなく通信が不可能な地域に入るよ。おやじく、このまま地球との交信は不可能になる」

「じゃ、俺たちの力だけで地球に帰ろう」

皆がシゲの周りに集まつて、不安げにシゲを見つめていた。

「コントロールセンター。間もなく通信不可能な地帯に入る。このまま交信は復旧できないと思われる。こちちで用意したプログラムで地球へ帰還してみる」

『こちちからコントロールセンター。了解した。こちちからも別のアプリーチで援護する』

その言葉を最後に、地球との交信は終了した。シゲはイヤフォンをはずして、自分の席に座った。

一方、クボは新しいプログラムを登録し、マサトはガーメテへのプログラムを停止する作業をしていた。誰も何も話さないまま、キーボードの音だけがコントロールルームに鳴り響いていた。

「よし。停止した」

マサトは、腕を前方に伸ばして「うーん」と唸ると、立ち上がりクボのそばに行つた。

「クボ。手伝おうか?」

「いや

クボは頭を抑えてじつとしていた。マサトがクボの顔を覗き込むと、青白い顔をしていた。眉間に皺を寄せ、ひどく汗を掻いている。

「クボ！ 大丈夫？」

ヒロミもクボが尋常でないことに心配して駆け寄つた。その瞬間、マサトが息を呑んで、クボのキーボードの上にあつた紙を床に落とした。

「クボ　　これ入力したの？」

「マサト　あと　たのむ」

クボは、椅子から滑り落ちるように床に崩れ落ちた。

「クボ！ しつかりしろ！ マサト、どうした？ そのプログラムがどうかしたのか？」

一瞬で青ざめたマサトにタカが近づいた。マサトは床に落ちた紙を見つめたまま何も言わなかつた。そこへウサが近づいてきて紙を拾つ。

四、五秒沈黙が続いた。

そして紙に目を通していたウサが大声を上げた。

「わああああっ！ これ イオに行くプログラムじゃん？」

「何っ？ 本当か？」

「ウサ、プログラムくらい読めるもん。 これ、今クボが作ったの？ これ、修正も困難なプログラムになつてるよ」

「マサト、修正できるのか？ 本当にこのプログラムを入力してしまつたのか？」

マサトは正気に返り、クボのいなくなつた椅子に腰掛け、キーボードを叩きながらモニタを流れる文字を見ていた。

「イオのプログラムです。修正には時間が掛かります」

シゲとタカが顔を見合わせて絶句した。その横で、ヒロミがクボを仰向けにして、脈を診ていた。

「これからクボの様子を見るわ。タカ、医務室まで運んでくれる？ タカがクボを抱え上げ、医務室に向かつた。ヒロミはマサトとウサが見つめるモニタが気になつたが、タカと共にコントロールルームを出た。

「ねえタカ。イオって、ガニメデと同じく木星の衛星よね？ あそこは全く開発されてないでしょ？」

「ああ。あそこに着陸しても何の基地もない。まだ火山活動が活発だから、開発ができない状態なんだ。今、木星の衛星で開発が完了

したのはガーメデだけなんだ。エウロパも氷の上に基地を作ることに成功して、開発に着手したんだが、四十年位前にウイルスが発生して、そのまま開発は延期になつてるらしい。ウイルスそのものは駆除したらしいけどな。しかし、イオに着陸しても、地球には帰れないぞ。それは、クボも知つてははずなんだが

「クボ　どうしたのかしら。そんな間違いをする人じゃないので、医務室に着くと、タ力はベッドにクボを寝かせ、手足を固定した。「みんなに、クボの様子がおかしくなかつたか聞いてくるから。何かあつたら、内線で連絡する。イヤフォンを装着しておいて」「わかった」

タ力は、軽く手を上げて医務室から出た。ため息をついて天井を見上げる。無機質に天井を這うケーブルを眺めた。信号を発したところから、行動を起こす所までを繋ぐケーブル。赤、黄色、黒、緑、青のケーブルが、血管のようにシャトル内を這つていた。

小さく口を開けたタ力は、呼吸を止めて意識を自分の中に戻した。タ力の思考をする時の癖である。目を細めて一つ溜息をつくと、医務室に戻った。

「ヒロミ、一通りの検査が終わつて、もし異常がなかつたら、クボの身体を金属探知機で調べてみてくれ」

「え？　金属？」

「頼んだぞ」

それだけ言つと、医務室から飛び出して、コントロールルームに戻つた。

マサトがクボの席で、キーボードを叩いていた。横でウサが一言言つてみると、マサトは頷きキーボードを叩く音が早くなる。シゲは、後ろから一人を見つめていた。

後方で扉の開く音がして、タ力がコントロールルームに戻つてき

た。

「クボは？」

ウサがマサトから離れてタカの目の前でジャンプした。四十センチの身長の差を気にして、タカの視界に入ろうとしているようだつた。

「ウサ、鬱陶しい」

タカはウサの頭を押さえつけた。

「クボはまだ意識を失つてるよ。最近、クボの様子はおかしくなかつたか？」

「ウサ知つているー。クボね、首が痒かつた」

「ああ。昨日、ロビーで寝てしまつて、その後しきりに首を搔いてたな」

シゲが頷いて腕を組んで、俯いた。

「虫刺されつてことはないだろうし、酸欠つてこともないよな。感染の可能性も。だいたい病気になつたからつて、地球へ帰るプログラムとイオのプログラムを間違えるはずがないし」

「そつなんだよな。まず有り得ないミスだよな。何か別の要因が

「 その時、全員のイヤフォンからヒロミの声が聞こえた。

『みんな聞こえる? わかつたよ。クボが混乱した訳』

「どうした?」

『遠隔操作されてたの。首にチップが埋め込まれてた。これは多分受信機。機内のどこかに発信機があるはずよ。脳を操作されていたのかしら?』

ヒロミの声が途切れると、タカとウサは示し合わせたようにコントロールルームを飛び出した。各寝室、実験室、動力室、格納庫、食糧庫。各ブースを隈なく探した。そして、十数分後、二人はコントロールルームに戻ってきた。ヒロミはすでにコントロールルームに戻っていた。

「見つかったよ。」『飯といつしょにあつた』

「食糧庫の隅に貼られてた。意図的だな」

タ力は三センチ四方の銀色の立方体をウサに渡し、ヒロノミシャ

ーペンの芯を三分の一の長さにしたような受信機をウサに渡した。

「これ、うちの施設で作った物かも。似たような機械を見たことがあるよ。地球に帰ったら、ヒルさんに聞いてみる」

腰にぶら下げる小物入れに無造作に二つの機械を無造作に入れた。

「あ。発信機の電池はずさなきや」

ウサは小物入れを腰から外して床に座り込み、袋の中の物を全部ひっくり返した。今入れたばかりの発信機と受信機を床に散らばつたガラクタの中から探し始めた。それを見た他のクルーたちに一瞬だけ優しい微笑が戻った。

「さあ。これからどうするか、話し合おう」

シゲが席に戻るとウサを除く他の者も席に戻った。椅子を百八十度回転させ、キーボードやモニタに背中を向ける。全員の顔が見渡せる形になった。中央の床にはウサが座り込んでいた。

「まず、ヒロミはクボの状態を報告して」

「クボの首筋に、チップが埋め込まれてたの。傷ひとつ残つてなかつたわ。短時間で入れたのなら、すごい技ね。食糧庫にあつた発信機からある信号が出て、クボの受信機に受信をすると どうなるのかしら? ウサわかる?」

「うん。あれね、たぶん 脊髄と脳に作用する信号が出るの。前頭葉と海馬の能力を低下させるの。そうすると、判断が鈍くなるから、行動が変になるよ。」

例えば、事前に「ラーメンを食べなさい」という指令を無意識のレベルで受けたとするでしょ。で、焼肉を食べようと思つてる時にその信号を受けると、焼肉じゃなくてラーメンを食べちゃうの

「後遺症は?」

「うーん。後遺症はあんまりないと想う。昨日埋め込まれたでしょ

？時間短いもん

「そうか じゃあ、マサト、クボが目覚めるまで、プログラムの変更はお前に任せる」

「わかった。でも、この船の酸素と燃料が残り少ないんだ」「あどどれくらい？」

「地球上には足りない シゲが険しい顔をした。

「ガニメデに行くなら足りるのか？」

「一つ提案があるんだ」

マサトは、神妙な顔でそう言った。全員が固唾を呑んでマサトを見つめている時に、コントロールルームの扉が開いた。

「クボ！」

「大丈夫なの？」

「申し訳ない 本当に 取り返しのつかないことを

クボは、部屋に入るなり座り込んで、顔を伏せた。シゲが立ち上がり、クボに近づいた。

「聞いたよ。操作されてたんだろ？ 仕方ないとは言えないが、今は地球に帰ることに全力を尽くそう。クボの協力も必要なんだ」

シゲがクボの肩を触ると小さく震えて、一層床に近づいた。

「しつかりしてくれ。急いでプログラムを変更して地球に戻らないと、酸素も燃料も足りなくなるんだ」

ヒロミも傍に座り込んで、クボの肩を抱いた。ヒロミにクボをまかせ、シゲは席に戻った。

「マサト。そのもう一つの提案を聞かせてくれ」

「このまま エウロパへ向かう」

俯いていたクボは顔を上げて、マサトを見つめた。全員が言葉を発さずにマサトの続きを待つていうようだつた。

いつもよりも、少し大人びた表情をしたマサトが、小さく息を吸つて口を開いた。

「エウロパへ向かうのが、一番いいと思つ」

「マサトの言葉に、誰もがどう答えていいのかわからなかつた。暫くの沈黙の後、口を開いたのは機長のシゲだつた。

「ガニメデは？　ここからガニメデには向かえないのか？」

「ガニメデまでは燃料が持たない」

「しかし、燃料が持つ可能性があるなら、ガニメデに向かつた方が。だいたい、エウロパに行つても何もないだろ？　開発がストップして、基地はもう動いていないし、ウイルスが発生したから誰もあそこには残つていなければ」

「ああ。でも、ウイルスの駆除は完了したし、酸素や燃料はそのまま大量に残されてるはずだ」

「知つてるようだ、言うな」

タカが、怪訝そうにマサトを見た。

「　　知つてるんだ。五年前まであそこへいたから

「　　！」

「聞いたことあるでしょ？　東棟で秘密裏に行つてていると言われている実験、「人間の冷凍保存」。あれは噂じゃなくて、エウロパで本当に行われていたんだ。それで、最初の被験者は、俺　なんすよ」

聞く者全員の表情が凍つたまま、マサトの顔を見つめていた。

マサトが冷凍保存の被験者？

「今は俺の話をしてる時間はないつす。早く、エウロパに軌道を修正しないと」

シゲは立ち上がり、全員を見渡した。

「マサトの指示に従おう。悩んでいる間にも、燃料も酸素も消費しながらイオに向かつてるんだ」

「いいのか？　そんなに簡単に信じじて？」

タ力は眉間に皺を寄せて、首を横に振った。

「今は信じるしかないだろ？。 これからエウロパに向かうこととする」

ウサは首を傾げて「うん。 マサト嘘つかないもんね」とエウロパ行きに賛同した。

「私は、シゲの指示に従うよ」

ヒロミがそう言つと、隣でクボが頷いた。そして、全員がタ力を見た。

「 ああ。俺も、シゲの命令に従うよ」

シゲは安堵した表情でタ力を見た。マサトもほっとしてような表情を浮かべている。

「では早速だが、クボとマサト。エウロパに軌道修正してくれ」

「わかった」

「了解つす

クボが立ち上がり、マサトの傍に近づいた。

「マサト。迷惑をかけた」

マサトは、「いいえ」と言つてキーボードに向かった。

「ウサ。エウロパまでの時間を弾き出して、酸素、燃料が足りるかを調べておいてくれ」

「はあい。タ力にも手伝つてもらつていい？」

タ力はシゲを軽く見た後、シゲが頷くのを確認すると「手伝うよ」と言つて、ウサと実験室に消えていった。

地球から離陸して一時間十五分経とうとしていた。クボ、マサトは、エウロパへの軌道修正を完了し、燃料、酸素も、エウロパ到着まで間に合つと判断された。

「燃料は通常通りに使って、なるべく急いで到着する。酸素は、通常の八十パーセントの使用量で使う。少し息苦しいかもしねだが、

我慢してくれ

全員揃つたところで、シゲがそう伝えた。

「あと一時間ほどでエウロパに到着するはずだ。それまでの間に一
つ

シゲはそう言つて、マサトの方を見た。

「 冷凍保存の 話すね？」

シゲが額くのを見ると、マサトは少し俯いて口を開いた。

「俺が生まれたのは一〇五九年なんだ」

「え？ 今、二二二五年だから そのまま生きてたら六十六歳？」

ウサが瞬時に計算して、瞬きもせずに驚いた。

「 そう。ちょうど、ウサたちの親の世代 になるかな？ 俺は十八歳でアンダーグラウンドエイジアに入つて、それから三年後にエウロパの探査チームに入つたんだ。その頃はガニメデよりも先にエウロパを開発する予定だつたんだ」

マサトは、一旦深く息を吸うと、目を閉じた。

「 その時のメンバーは、俺と、コウジと、シユウだつた。シゲ
コウジって知つてるよね？」

「 え？ お、おやじ？」

「 そう。シゲのお父さんと組んでたんだ」

少し癖のある髪を搔きあげ、シゲを見つめた。

「俺たちは向こうに行つてから、思いもよらない事故に遭つたんだ

「

宇宙開発を始めたばかりのアンダーグラウンドエイジアは、木星の衛星である氷の星エウロパの開発に着手し始めたところだった。地球と同じようにエウロパにも大気圏を作り、氷上で暮らせるようにならないかと研究を重ねていた。アンダーグラウンドエイジアに来て、三年が過ぎたマサトにエウロパ行きの指令が出た。地球でシャトルの開発に携っていたマサトにとって、それは願つてもないチャンスだったのである。

「俺、シャトルの技術士なのに。向こうで役立てることがあるんですか？」

「君の技術力と思考能力は、この施設ではば抜けたものだからね。あちらでも活躍してもらいたい」

普段入ることのない東棟の一室に呼ばれ、そう言われた。

「現在共にチームを組んでもらっている、コウジ、シユウと一緒に飛び立ってくれ」

出発は一ヶ月後。それまでに、シャトルに乗るための訓練を繰り返すこととなつた。

「俺たちはマサトのおまけなのか？」

東棟に呼ばれずにエウロパ行きが決まつたコウジは、鼻息を荒くしてマサトに近づいた。

「そりや、マサトの方が技術力あるしな。アングラの知的財産って噂されるるくらいだし。仕方ねえけど」

「アングラくとは、アンダーグラウンドエイジアの省略した呼び名である。マサトの存在はものの三年で、アンダーグラウンドエイジアの知的財産と言われるまでになつた。」

「俺、そんな自覚ないんすけど」

「いいの。いいの。お前はそれでいいの。頭良く見えて、本当に頭

が良い奴なんて、憎らしげだけだからな

「マサトは、深く意味も考えずに「そつすか！」と素直に喜んだ。

隣で見ていたシユウがくすくす笑いながら言った。

「マサトはいいよな。このプロジェクトが成功すれば、幹部候補か

？俺たちはあくまで付属だもんない。お前が東棟に移つたら、俺たちも呼び寄せてくれよな。できることなら、技術職じゃなくて研究職に就きたいよ」

「そりゃ？俺は技術職でもいいなあ。十分楽しいじゃん。俺たちが作つたり整備したシャトルが、宇宙へ飛んでるんだぜ。すげえよ」

コウジはニコニコしながら答えた。マサトが首を傾げてシユウとコウジを交互に見た。

「そんな。俺は東棟に行く気はないよ。とにかく、ヒウロパでしつかり任務をこなそうぜ」

マサトがそつまつと、シユウはマサトとコウジの肩を抱いて「じや、訓練に行きますか」と促した。

それから約一ヶ月後

マサトは、コウジと地上に出ていた。太陽は焼けるように暑く、地上で草木が成長しなくなっていた。数十年先には地上で人間が暮らせなくなるだろうと予測されていた。

そんな、灼熱の地球でマサトはコンクリートの上に寝転がついた。コウジはマサトの足元に座っている。

「あつついなー」

コウジは、太陽光を避けるためにシーツを頭から被り、汗を流していた。

「太陽の暑さを感じておきたいんだ

「もう、部屋に戻ろうぜー。熱中症になっちまつ

コウジは振り返つて転がつているマサトを見た。瞬きもせずに、空に流れる雲を見ている。マサトはコウジの視線が自分にあるのを感じて、にっこりとコウジに向かって微笑んだ。そして、ゆっくり

と空に視線を戻した。

憐れだな

どこかへ消えてしまひやうなマサトに、コウジは声を掛けずにいら
れなかつた。

「絶対、地球に帰つて来よ!」

マサトがぼんやりと頷いた。コウジは隣に寝転んでマサトの手首
を掴んだ。コンクリートの熱さが、あつといつまに背中に浸透する。
熱さを一時我慢して、マサトが見ている空を、一緒に見上げていた。
いつまでもこうしていたい。一人は強くそう思つた。しかし、そ
んなささやかな願いも叶つことはなかつた。

地球を出発して、一日後にはエウロパへ到着した。小さなトラブ
ルも無く地上を離れ、二日後にはエウロパに到着した。まだ大気圏
の完成していないエウロパでは、コロニーと呼ばれる大きなドーム
をいくつも作つていた。コロニー内では宇宙服も酸素ボンベも必要
なく、気候も安定していた。その中でも一番大きなコロニーでマサ
ト達は研究を続けていた。

そして、エウロパに上陸して半月が過ぎた頃。突然、研究者たち
が原因不明の病気で倒れ、死亡した。研究よりも先に、原因不明の
病気の解明が急がれた。その結果、蔓延し始めたウイルスは空気感
染するものだと判明。感染者は別のコロニーに移され、治す術もな
く発症から約一週間で命を失つていった。上陸から一ヶ月が過ぎた
頃には、エウロパに滞在するものの一十五パーセントが感染し、命
を落としていった。その後、地球から細菌学者を連れてきて原因追
及に力を注いだ。

エウロパ上陸から一ヶ月半過ぎた頃、エウロパの氷の下から発生

するガスが人体に悪影響があると分かつた。現状では打開策は無く、感染していない研究者、技術者すべてが地球に帰還することになった。感染してから一週間ほどで死に至るウイルスは帰還の準備をする者たちにも、容赦なく襲つていつた。

そして、マサトがウイルスに感染した。

アンダーグラウンドエイジアの幹部達に衝撃が走った。知的財産と言われるマサトが残り一週間の命となつたのである。マサトを失うわけにはいかぬと、ヒウロバと地球で話し合ひが何度もなされた。その間にもマサトの病状は悪くなる一方だつた。

「マサト。きっと、みんながお前のことを見つってくれるから

」
ガラス張りの個室に眠るマサトを、ユウジとショウはガラス越しに見つめていた。たまに目を開けては、ユウジたちに視線を送り弱弱しく微笑んだ。華奢な身体が尚一層痛々しく映る。

そして、マサトが倒れてから三日後。決断が下された。

「え？ 冷凍保存？」

マサトと共にチームを組んでいたユウジとショウにその報告が届いた。

「ここで冷凍するんですか？」

「あんな辛い状態のまま眠らせるんですか？」

二人の質問に沈黙で答えた中年の男は、「明日保存器に移す」とだけ言って、ユウジたちから離れようとした。

「待つてくださいー冷凍保存の実験は完成していないと聞いています。まだ、テスト段階だと」

「マサトが第一被験者となる」

ユウジたちは、報告を受けたその足でマサトの部屋に向かつた。

コウジは室内のスピーカーに通じているマイクを借りて、マサトに話しかけた。

「マサト。お前、明日　冷凍保存されることになった」

マサトは田を見開いて起き上がった。ベッドから降りて、ガラスの向こうに立つコウジに近づいた。マサトがガラスに手を当てるといコウジもガラス越しに手と手を合わせた。

「俺たちもそんなことはしたくない。一緒に地球に帰りたいんだ」マサトは、コウジを見つめて首を振った。ガラス越しに「イヤだ」と何度も声が聞こえた。

「でも、このままじゃお前、他の奴らと回りようで死ぬだけだから

」

『構わない。冷凍になんかされたくない…このまま死なせてくれ!』

「マサト　わかつてくれ

『イヤだ!』

「生きられる可能性があるの」、マサトが田の前で死んでしまうのは嫌なんだ!』

『俺は、いつも覚めるか解らない眠りになんてつきたくない!』

マサトはガラスを拳で叩いて、座り込んだ。体力をかなり消耗しているにもかかわらず、力強く首を振った。

『俺を一人にしないでくれ…どうして生き延びるかとは選択できるのに、死ぬことを選択させてはくれないんだ!』

コウジはため息をついて、頭をガラスに凭せ掛けた。マサトの言葉が深く心に入る。

『どうして死ぬことは選択できないのか』

マサトを生き延びさせるだけが、優しさではないのだろう。だが、生きてゆける可能性があるにも関わらず、死を選択することは自分にはできなかつた。

『マサト。きっと迎えに来るから。俺たちが生きてる間こいつと解凍するから。だから

『このまま死なせてくれないのなら　いつそ　今、殺してくれ

その場に泣き崩れるマサトを抱きしめてやることもできず、ユウジとショウはガラス越しにマサトを見つめていた。言葉を掛けられないユウジの肩にショウはそっと手を置いた。

「ユウジ。マサトに選択の余地はないんだ。このままお前が何を言つても、マサトを苦しめるだけだ」

そう言つて、ショウは部屋から出て行つた。しかし、ユウジは動かなかつた。確かに、マサトに選択の余地はない。だからこそ一人で眠りに就くマサトのそばに居てやりたかった。これから寂しい思いをするであろうマサトの、自然の流れの中で生きたマサトの最後の姿を、田に焼き付けておきたかった。そして、マサトの記憶に、自分を残しておきたかった。マサトは一人ではない。そう、伝えたかった。

「約束する。必ず迎えに来るから」

泣きじやぐるマサトを抱きしめてやることもできず、二人はガラスを隔てて、そのまま朝を迎えた。

マサトが麻酔で眠られ、冷凍保存器の中に移された。部屋の中には三台の保存器があり、真ん中の保存器に入れられた。

「冷凍を維持するためのエネルギーは足りるんですか？」

ユウジは、透明の円柱の中で眠るマサトを見つめたまま、技術士に声を掛けた。

「三台同時に使つても、百年は維持できるよ」

「解凍の予定は何年ですか？ 五年？ 十年？ それくらいにはウ

イルスの治療方法が見つかりますよね」

「いや、地球からの指令では約四十年と聞いている」

「よ 四十年？」

思わずユウジは、技術士の肩を掴んでしまつた。

「そんなに眠らせたら、マサトは誰も知らない世界に田覚めること

になるじゃないですか！」

「しかし、エウロパが危険な以上、ここの開発はストップする。これからは、ガニメデの開発に力が入るだろうから、エウロパに手が回るのは四十年後くらいと予測したのだろ？」「約束したんだ。俺たちが迎えに来るつて 約束したんだ！」

「何とも言えない。ここウイルスが落ち着くまでは、このエウロパに着陸することはないだろ？四十年というのはあくまで予測であって、ウイルスが落ち着かなかつた場合には、もつと長くなることも」

ユウジは保存器に近づき、透明の容器に爪を立てた。

「せめて、スイッチは俺に押させてください」

技術士は頷くと、他のスタッフに準備を急ぐよつ急かした。

「四十年後、また会おう」

スイッチにゆっくり指が伸びた。

スイッチを触れても、なかなか力が込められなく、指先が小さく震える。後ろから「ユウジ」とシユウに呼びかけれ、目を閉じて指に神経を集中した。

カチッといつ軽い音の後に、低いモーター音が部屋中に響き渡つた。

マサトの姿は見えなくなり、そこには白い円柱があるだけになつた。

コウジとシユウが保存器のある部屋から出ると、扉の外でコウジたちにマサトの冷凍保存の報告に来た中年の男性が一人立っていた。通り過ぎようとすると呼び止められた。

「マサトが冷凍保存されていることは、地球に帰っても誰にも言わないよ!」

「この技術は、まだ公表できる段階ではない。他言しないよ!」

静かな威圧感を残して、中年の男性は廊下の奥に消えて言った。

四十年後の一一〇〇年。

ヒウロパからシャトルが帰ってきた。

アンダーグラウンドエイジアの東棟にいる幹部だけで構成されたチームが戻ってきたのだ。任務は、マサトの地球帰還だつた。マサトの冷凍保存から四十年が経過しても、ヒウロパは開発再開はされなかつた。しかし無人探査機で、ヒウロパの有毒ガスの発生が沈静化したことが確認できたので、マサトの地球帰還が実現したのだ。マサトの身体は、東棟地下の解凍専用室に安置され、解凍が完了するといハビリが始まつた。

時間の流れが分かりにくい東棟地下で生活しているマサトは、今が何年なのか、何処にいるのか理解していなかつた。

「すいません。俺、冷凍保存されてたんですね？」

「今は何もお話をできません」

マサトが何を聞いても回りのスタッフはそう答えるだけだつた。マサトはどれ位経つたのか分からぬまま、どこにいるのか分からぬまま、目覚めてから二ヶ月を過ごした。冷凍保存されたような感覚はなかつた。冷凍保存されたのは嘘であつたのではないかと思つ始めた頃、白衣の老人の男性が目の前に現れた。

「今日は、マサトの今の状態と、今の環境について話をする」
いつも過ごしているフロアから一階層上のフロアの一室で、マサトは現状を認識することになつた。

「まず、マサト、おぬしが冷凍されたのは、一一〇八〇年のことじゃつた。ヒウロパでウイルスが蔓延し、感染したので冷凍保存されたのだつたな。それは覚えてるかな？」
「はい」

「そして今は、それから四十年経過している

「え？」

「今年は二二二〇年。ちょうど四十年後なんじゃ」

「

「場所はアンダーグラウンドエイジア。地球に戻つて来ておる」

「

「大丈夫かね？」

「嘘ではないですね？俺、冷凍保存された感覚はないんです。普通に眠つて目覚めた。そんな感じだつたんですけど」

「ほう　　それは興味深い。研究資料に残しておくことにするか。もちろん冷凍保存された君は、四十年の時を経て目覚めたのだ」

「

「理解できなかね？」

「いえ　　驚いているだけです。理解はできます」

「それを聞いて安心したよ。他に何か質問は？」

「ユウジとシユウは？」

マサトは、少し不安げな表情で聞いた。目の前の白衣の老人が、手元の資料を広げた。

「一緒にチームだつた人だね。ふむ。シユウは、契約を終了してアングラから出て行つたよ。それからユウジは　　地球に帰つてきてから、ガニメデの開発チームに入つたのだが、向こうの事故で無くなつた。今から十三年前の事じや」

「そう　　ですか」

「ユウジの子供が、今このアングラにいるよ。シゲといふんじゃが

「

マサトは、目を閉じて一呼吸した。

「年はいくつですか？」

「今年で二十九歳だつたかのう」

マサトは暫く目を閉じていた。ユウジの子供が自分よりも年上になつてゐる。奇妙な感覚だつた。自分が眠る前に共に過ごしたユウジやシユウはここにはもういない。それならせめて、ユウジの子供

と共にいたかつた。ユウジの存在を傍に感じながら、新しい世界で生きていたかつた。

マサトは扉を開いて、老人を正面に見据えた。

「そのシゲと同じチームに入れてください。俺は新人技術者ってことで置いてもらえませんか？」

「それは構わんが。四十年前同様、ここでの研究、開発には携つてもらうよ。それから、自分が冷凍保存されたと言つことは、誰にも言わんように。冷凍保存は未だ研究途中のプロジェクトなんじゃ」

「わかりました」

白衣の老人は、広げた資料をまとめ、部屋から出て行った。

遠ざかる足音を聞きながら、部屋に残されたマサトは机に突つ伏した。

「　ユウジ　！」

もうユウジと会つ事ができないのが、信じられなかつた。長い時間が過ぎて行つたのだと痛感する。

出発の前日、熱いコンクリートの上で共に空を見たのが昨日の事のように思い出された。「絶対地球に帰つて来よう」と誓つた仲間。こんな形で地球に帰つてくるなんて思いもしなかつた。

そして、生き長らえた事が、嬉しいとは正直に思えなかつた。

「迎えに来るつて約束したじゃないか　ユウジ　！」

もう一度と泣かないと思いながら、四十年前の思いに身を委ねていた。

マサトは話しあると、シゲの近くに歩み寄った。足元に座つてシゲの顔を両手で包んだ。

「本当に ユウジにそつくりだ 」

「小さいとき、親父に聞いたことがあるよ。大事な友達と別れたことがあるつて。約束を守りたいんだつて。守らなくちゃいけないんだつて、いつも言つてた」

シゲの顔から手を離すと、シゲの膝の上に顔を伏せた。

「まさか、それがマサトだつたなんてな 。。信じられないよ」

「 ユウ ジ 」

マサトの声は震えていた。四十年の時を越えて目覚めた者の苦惱。どんな言葉をかけても、マサトの心は癒せないのではないかとシゲは思った。あまりに重い告白で、誰からも言葉が出てこなかつた。シゲはマサトの頭を軽く叩いて、言葉を絞り出した。

「 話してくれてありがと」

ゆっくりマサトは顔を上げ、窓の外を見た。外には、昔に見た記憶のままの大きな赤茶色の惑星が見えた。

ユウジと一緒に見た時と、何も変わらない太陽系最大の惑星。

「 木星が見える 。。もうすぐエウロパに着くよ」

そう口に出して、気がついた。ユウジも赤茶色の惑星を見つめながら、同じ事を呟いたのだった。思わず口元が綻ぶ。

そして、全員が窓の外を見た。美しい太陽系最大の惑星が見える。マサトは腕時計を見て、暫く目を閉じた。何かのスイッチが入つたように勢いよく目を開き、立ち上がつた。

「 さあ、着陸準備をしなきや。あ、それとお願ひなんすけど。これからも、その 僕との関係は何も変えないで欲しいつす」

シゲは頷き、ウサは「もちろんっ！」と元気に答えた。他の者も皆頷いてマサトを見つめる。

「じゃ、準備を始めよう。クボは着陸準備。マサトは着陸場所をクボに指示してくれ。ウサは着陸後、エウロパからガニメデや地球と交信が出来ないか確認すること。マサトは手が空いたら、エウロパの簡単な地図と、酸素、燃料の保管場所を僕とタ力に教えてくれ。シゲは、テキパキと指示を出すと全員が散らばった。

クボと打ち合わせが終わったマサトが、シゲとタ力のいる実験室に来た。

「エウロパのメインコロニーの略図を書いたつす。着陸したら、船外服を着て、コロニーに入ります。コロニーに入つて正面の大きなビルの地下に酸素、燃料は保管してあります。専用のエレベータで各タンクをシャトルの傍まで運べます。このタイプのシャトルなら、タンクの設置も自動で出来るはずですので

「え？ そんな技術もここにはあるのか？」

シゲは、驚いて手に持つていたペンを机に落とした。

「ええ。重力の小さいエウロパでは可能だつたので、開発されました。地下でコントロールすれば、すべて全自动で搭載可能です。クボには、着陸の方法、場所も細かく指示してますから。問題ないです。ただ

俯いて言葉を濁らせたマサトをタ力が促した。

「ただ 何だ？」

「燃料がギリギリだと思います。到着してから、ゆっくりと専用スペースに入るためには、それなりの燃料が必要なので。余計な動きをして燃料を使いすぎたら、専用スペースまで辿り着けません

「クボの操作能力なら大丈夫だろ？」

「ええ。信じてます。まず大丈夫だとは思うのですが

マサトはそこで言葉を区切つて、略図にさまざまな注意事項を書き込んだ。シゲとタ力がそれを目で追う。リズム良く書いていた手が

途中で止まつた。

「さつき話した、四十年前の話なんすけど」「マサトは、ペンを置いてゆっくりと話し始めた。

「子供であるシゲにこうじうことを言つのは、ちょっと躊躇われるけど、一応話しておくつす。ユウジの死に、俺、疑問があるんつすよ」

「疑問？」

「後から聞いた話がどうも腑に落ちなかつたので、東棟のシークレットルームにある資料で調べたんすけど、ガニメデの事故は、ユウジの他に一人も死んでたんです。それが、ユウジと一緒にチーム組んでた人とかじやなくて、三人とも何の関係もない人だつたんすよ。それつて変でしょ？」

タカは首を傾げて、シゲを見た。シゲは頬杖を付いて口を開いた。
「事故だろ？ そこに居合わせただけじやないのか？」

「いや。その事故は、ガニメデでビル建設の途中に三人がビルから落下したつていう事故だつたんすよ。建設に携つていた、技術員一人と研究員二人が死亡つて。ガニメデの技術員のユウジと、地球でシャトルの開発をしていた研究員、それと開発室の研究員の三人だつたんつす。ユウジは、まあ、ガニメデの技術員だから、そういうこともあると思うんつすけど。同時に事故にあつた他の一人が変でしょ？」

「それで、真相は分かつたのか？」
タカが結論を急ぐよに聞いた。

「まだわからないつす。当時、ユウジと仲が良かつたシユウも、アングラを去つたし、当時の人間は、もう死んでるか、引退してるかつす。資料だけじや、わからないつすね」

タカは、眉間に皺を寄せて、シゲに断りを入れた。

「シゲ、気を悪くしないでほしいんだが。マサト、それは他殺かも知れないってことなのかな？」
マサトは黙つて頷いた。

その時、船が大きく揺れた。

「どうした？何があった？」

シゲが内線を使って、シャトル内の全員に呼びかける。誰も答える者はいなかつた。シゲは実験室から飛び出し、「コントロールルームに向かつた。

「クボ！どうした？」

コントロールルームの窓の外には、エウロパの「ロロニー」が見えた。着陸用と思われる大きなスペースも見える。シャトルは左右に大きく揺れながら着陸用のスペースにゆっくり近づいていた。クボは操作に集中、ウサはモニタを見ながら、何かをカウントダウンして叫んでいる。その時タカがコントロールルームに入ってきた。

「ウサ！どうした？」

タカがウサに近づくと、ウサは額の汗を拭おうともせずに、モニタに移る燃料の残量をカウントダウンしていた。

「燃料が足りないんです！飛行に必要な燃料を最小限にして着陸をしてるんですけど。予定の場所まで辿り着くか

クボが操縦桿を握りながら、必死に説明した。

「あと四キロだよ！燃料はあと三キロ分！クボ！どんなに揺れても右に寄らないで！」

ウサは燃料のモニタ、シャトル前方を映し出すモニタを交互に見て叫んだ。

「右の暗い部分はクレーターか？」

シゲは、シャトル前方を映し出すモニタを凝視した。シャトルを誘導するように白いラインの引かれた道の右には、海のように暗い空間が広がっていた。

「着陸してから、ゆっくりスペースまで動かそうと思つてたんだけど、スペースに直接着陸するよりほかに方法がないんだ！」

「こんなところにクレーターが出来たなんて」

コントロールルームに入ってきたマサトは、四十年前との違いに驚

いていた。

「絶対着陸してやる 」

クボの戦いは三十秒後に実った。墜落同然のよつた着陸だったが、見事予定箇所に着陸できたのである。

「良くやつたな、クボ 」

全員の祝福を受け、クボは袖で汗を拭つた。

「でも、ここは不安定すぎる。すぐ横にクレーターがあるんじゃ危険だから。早く燃料と酸素を装着して、少し移動しよう」マサトの冷静な判断に、全員が頷いた。

「ねえ、マサト。今の、無理な着陸のせいで、エンジンが変になつてゐる。あとね、着陸の衝撃で、電気回線がやられた場所があるみたい。ほら、廊下の電気ついてないでしょ？」

ウサが、キーボードを力タ力タ叩きながら、マサトを振り返つた。

マサトは廊下を確認すると確かに電気が点いていなかつた。

「ウサと、マサトはここに残つて、シャトルの修理しなきや」
シャトルの修理は、機関士であるマサトの仕事であり、電気技術士でもあるウサの得意分野であつた。マサトは、シゲとタカに、先ほど説明した略図を渡し、操作方法が書かれてるファイルのある場所を教えて、コロニーに向かわせた。

「クボ、お願いがあるの。通信室を探して、無線が作れそうな材料を見繕つてもらえる?ウサ、あとで追いかけるから。あと、そこの通信室から、ガニメデと地球上にSOS信号出しておいて」

「え?俺、一人で?」

「私も手伝うよ」

ヒロミが名乗り出て、クボと共に通信室に向かつことになつた。シゲ、タカ、クボ、ヒロミは船外服を着て、シャトルの外に出た。

エウロパの地上は、太陽から遠いためか、日が差しているにも関わらず、寒かつた。

「船外服を着てても寒いっていっては、すこし寒さつてことだよね？」

ヒロミが腕を摩りながら、急ぎ足になつた。後ろを歩く、タカとシゲは、地上とは違う重力に慣れないうつだつた。しかし、重力よりも気になることが二人にはあつた。

「さつきのマサトの話。途中になつちゃつたな」

タカは、シゲの顔を見た。やはり気になつていろいろしく、少し落ち込んだ表情をしていた。

「他殺だとしても、どうして親父がそんな目に遭わなきやならないんだ？」

「ロビーの入り口に到着したシゲは、扉の隣にあるパネルに、先ほどマサトから教えてもらつたIDとパスワードを入力した。パスワードの最後の一桁を入力終えた時、扉が開くのと同時に地面が大きく揺れ始めた。

「な なんだ？」

「地震か？」

十秒ほど続いた揺れが収まると、ヒロミが悲鳴を上げた。

「シャトルが ！」

それを聞いた三人が振り返ると、シャトルがゆっくりとクレーターの方に滑るように動いていた。

「なつ クレーターに落ちるっ！」

シゲは、シャトルに向かつて走り出した。シャトルは、クレーターの傍にある大きな岩のような突起にぶつかり、クレーターに落ちるのは免れた。

しかし、次の瞬間。目の前が真っ赤になつた。走つていたシゲが、思わず立ち止まつた。

ウサは、コントロールルームのパネルに向かって、停電の原因を調べていた。

「ここと、ここが切れてるなら。やっぱり動力室のどつかが断線したのかな。」

立ち上がり、コントロールルームを出ようと扉に近づいた時に大きな揺れがシャトルを襲つた。

「何っ！ 地震っ？」

前方を映し出すモニタを見ると、地面が動いていた。しかし、瞬時にシャトルが動き出したと判断した。

「ここやばいっ！」

後方にある出入口の傍に船外服が用意してあることを思い出して、廊下に飛び出した。

「っ！」

再び、大きな衝撃があり、爆風が背中を押した。

「タカつ！」

熱いと感じたのは一瞬で、廊下の壁が近づいたと思つた瞬間には、全ての感覚が麻痺したようだつた。

浮遊するような感覚の後、目の前に見覚えのある映像が見えた。それは、初めてタカと会つた場所。

太陽光を避けるように、日陰で座り込んでいたウサは、少しづつ太陽の光が足元に近づいてくるのを眺めていた。このまま、日向に出てしまい、太陽光を浴び続ければ、一時間もしないうちに死んでしまうだろう。それでもかまわない。望むところだ、とぼんやり足元を見ていた。

「何をしているんだ！」

遮光車から飛び降り、ウサを抱えあげて車に乗せた。

「何するのー 下ろして！」

「何言つてるんだ！ あんな所にいたら死んでしまうだろ！」

「だつて、ウサには生きていく場所がないんだもん！」

「とりあえず俺んちに来い」

汚れた手で潤んだ目を擦りながら暴れるウサと「少」女を、タ力は自分の家に連れて帰った。

部屋に着くと、ウサをシャワールームに放り込んだ。タオルと着替えを渡し、扉を閉める。まもなく、水の音がした。

そして、タ力の大きな服を纏ったウサを椅子に座らせ、「コーヒーを渡した。タ力は正面に座り、綺麗になつたウサの顔を良く見た。自分より五歳くらい年下に見える。道端で拾つたときは、もつと幼く感じた。

「親は？」

「いない」

「家は？」

「孤児院から抜け出したの」

「どうして？」

「だつて、大人になつたら出て行けつて言われるもん。ずっと一緒に居たい人どずっと一緒に居れないのはイヤ」

熱いコーヒーを啜りながら、淡々と答える。そして、コーヒーを飲み終わると椅子から立ち上がつた。

「どうもありがとう」

「どこ行くの？」

「どうか」

「俺と一緒にいたら？」

「どうして？」

「なんとなく」

「イヤよ。仲良くなつてから別れことになつたら辛いから」「ずっと一緒にいればいいじゃん？」

ウサは、少し悩んで首を縦に振つた。突然、何の前触れもなく始

また一人の生活。それから、タカとウサはいつも一緒に居た。親子でもない。恋人でもない。ただ一緒に生きてゆく相手。

爆発に巻き込まれ、薄れ行く意識の中、ウサはタカを強く想つた。

タカ、「ごめん。ウサが約束守れないかも

動力室にいたマサトは大きな揺れを感じた瞬間に、作業をしていたバッテリーが大きな音を立て爆発した。

「うわあっ！」

数メートル後方に飛ばされ、頭を振つて立ち上がるうとしたとき、小さな振動に気がついた。

シャトルが動いてる？

そう思つたときには、爆風が背中を焼いた。

「つ！」

ウサが危ないっ！

痛覚がなくなるほどの熱さに堪え、動力室の扉を開けると廊下の熱い空気がマサトを包んだ。

「　ウサ　　無事でいてくれ　　！」

立ち止まつたシゲの目の前で、突起にぶつかつたシャトルの前方が突然爆発した。シャトルの破片がシゲたちの足元に落ちてくる。

「マサト！　ウサ！」

まだ、小さな爆発を繰り返すシャトルにシゲは駆け出した。

「シゲ！」

タカは追いかけようとして、足を止めた。

「クボ、ヒロミ！　お前たちは、コロニー内に入つてくれ。ウサが指示したように、ガニメデと地球に交信を試みてくれ！」

そう言うとシゲを追いかけて、シャトルに向かつた。

その時、再びシャトルが大きな音を立てた。

「いや つ！」

ヒロミの叫びは、爆音でかき消され、クボに引き摺られるようにして「ロー」内に入った。

シゲとタカはシャトルの後方の入り口の前に立ち、マサトとウサの生存を願っていた。

熱くなっているシャトルの後方の扉を開くと、熱風が押し寄せてきた。

「ここまでは破損していないな。早く入って、マサトとウサをシゲが言い終わらないいう間に、タカはシャトルに飛び乗り奥に進んでいった。

「ウサーっ！ マサトー！」

照明の消えた暗いシャトルの中を手探りで歩いていると、二人のすぐそばで呻き声が聞こえた。

「 つ！ こ こに いま す 」

タカとシゲは走つて、声のするほうへ向かった。ショートする火花に照らされて、マサトが見えた。

「マサトっ！ 無事か！」

マサトは、額から血を流しながら、腕にウサを抱えていた。抱えられたウサはぐつたりとしていた。

「ウサ！ ウサっ！」

タカが声を掛けても、呻き声一つ上げずに目を閉じていた。

「コントロールルームの そばで、 爆発に巻き込まれたから

」

マサトが途切れ途切れに、ウサの状態を話そうとした。

「まずは、ここから離れよう。タカ、二人をレスキューボールに乗せてコロニーまで運ぼう」

タカはマサトからウサを受け取り、マサトはシゲの肩を借りて、

更に後方のレスキュー・ボールのあるところに向かつた。

レスキュー・ボールは、シャトルからシャトルに移る時などに使われる一人、もしくは二人用の球体の移動用装置である。怪我をしているウサは、船外服を着てコロニーまで歩くのは不可能なので、レスキュー・ボールを利用してコロニーに運ぶことにした。少々重たくなるが、重力の小さいエウロパなので、シゲとタカ二人いれば、何とかコロニーまで運べると判断した。

シゲは、レスキュー・ボールの扉を開いて、マサトを先に乗せた。続いて、ウサをレスキュー・ボールに乗せる。マサトが中から引っ張り上げ、何とか中に納まつた。

シゲは、レスキュー・ボールの扉を閉め、タカはレスキュー・ボールの操作室に入った。タカはレスキュー・ボールを船外に出すための長いアームを操作した。衝撃が少ないようゆっくりと動かす。地面に着いたところで、レスキュー・ボールからアームを外し、船内に格納した。

「じゃ、外に出よう。早く、このシャトルから離れない」と

アームを動かしていたタカが、シゲを促して船外に出た。

レスキュー・ボールの傍に駆け寄つた一人は、両方から手を掛け、持ち上げた。軽いとは決していえない重さのボールを、ゆっくり慎重に、しかし早くシャトルから離れようと、確実に歩みを進めた。

既に閉じられているコロニーの扉を、シゲは再び開け、コロニー内に入った。扉が閉じると、天井から空気が一気に入り込み、室内に酸素が取り入れられたことが分かつた。

その時、閉じられた透明の扉の外が赤く光つた。振り返ると、今離れたばかりのシャトルが更に爆発し、その衝撃で滑り止めになつていた岩の突起が碎かれた。シャトルは大きな音を立てながら、クレーター内に滑り落ちていつた。着陸をした所には煙と粉塵があるばかりで、そこにはシャトルの姿はもうなかつた。

シゲとタカは言葉もなく、その様子を見つめていた。シゲが「行

「う」「う」と小さく咳き、更に奥の扉を開いた。扉の先には、ヒロミが一つのストレッチャーを用意して待っていた。

「マサトもウサも無事なの？」

シゲとタカは、返事をしないでレスキュー・ボールの扉を開いた。中から血液の匂いが広がる。タカはゆっくりとウサを抱えて、レスキュー・ボールから出した。ヒロミと二人でそつとストレッチャーに寝かせ、血液で額に張り付いた前髪を搔き上げた。

「ウサ、きっと助けてやるから」

一方シゲは、マサトに肩を貸し、マサトは自力でストレッチャーの上に寝た。

「三階に大きな医務室があるので。簡単な治療は出来そうだから、そこへ運んで」

ヒロミは、大きな瞳に涙を浮かべながらも、衛生士として行動した。

「クボは、通信室から交信を試みてる。シゲは通信室に向かって。私は、二人の治療をするから。タカも手伝ってくれる？」

一刻を争う状態のウサを見て、ヒロミはウサのストレッチャーを押して、タカと共に三階に向かった。

「クボ。交信は出来るのか?」

シゲは通信室に入ると、クボの元に走った。見慣れないモニタを覗き込む。

「今、各方面に信号を飛ばして。誰かがキャッチしてくれるといいんだけど」

「そのまま続けてくれ。地球からの救助が近くまで来てるかもしない。ここにいることが分かれば、きっと来てくれるだろ? から」

「わかった。 で、マサトとウサは?」

シゲは隣の席に座ると、頭を抱えた。

「ウサは意識不明。マサトも重傷だ。今ヒロミが手当をしてる。誰の命も失わず地球に帰りたいな」

クボは、それを聞いて目の前の台を思いつきり拳で叩いた。

「俺が 俺がつ」

繰り返し拳を打ちつけるクボの腕をシゲは掴んだ。シゲには、クボの言わんとすることが解った。

「クボ! 落ち着け!」

クボはシゲを振り解いて、頭を抱えた。

「船も爆発して、こんな誰もいない星に取り残されて。この信号を誰もキャッチしなかったら、俺たちここで 俺のせいです」

「」

シゲは頭を抱えたクボを見つめていた。誰もクボを責めてはいけない。しかし、クボにはそれもまた辛いのだろう。

「諦めるな。最善を尽くそづ」

「うつ」

クボは、俯いたまま嗚咽を漏らしていた。シゲは、そつと立ち上がり通信室から出て行つた。

「マサト ウサ 死なないでくれ!」

通信室の扉の外で、シゲはクボの叫びを聞いていた。

「クボ」「

きつとクボはいつまでも責任を感じてしまつことだらう。無事、全員が地球に戻れても、クボはもう操縦桿を握らないかもしれない。そう思うと、シゲの気持ちも重くなつた。

今はクボをそつとしておこうと、シゲは他の者がいる医務室に向かつた。扉の前に立つと、中からマサトの呻き声が聞こえた。

「マサトー！」

勢い良く扉を開くと、マサトが苦痛に顔を歪めていた。マサトの身体をタ力が押さえつけ、ヒロミが火傷を負つた部分を消毒していた。

「マサト、お願ひ じつとして！」

ヒロミが、マサトの血で真つ赤にそまつた脱脂綿を足元の「ミ箱に捨てた。新しく消毒液を浸した脱脂綿をマサトの傷に近づける。

「ううわあっ！」

身を捩り苦痛に耐えるマサトから、シゲは目を逸らした。

「ヒロミ、麻酔はないのか？」

「あるんだけど、マサトがウサに使つてくれつて。マサトも相当辛いはずなんだけど

「マサト、麻酔使えよ」

消毒液と血液の混ざつた脱脂綿がマサトから離れるごとに、息を荒くして首を振つた。

「俺は、まだ我慢できる。ウサのために取つておいて

「でも、お前も裂傷や火傷が酷いんだぞ」

「この物には限度があるんだ。いつ救助が来るか分からぬ。残せる物は残しておかないと。ヒロミ、このまま続けていいつ

す」

ヒロミはため息をついて、また新しい脱脂綿を大腿部の裂傷に近づけた。血液の止まらない傷口を消毒する。脱脂綿はあつという間

に真っ赤に染まつた。

「んっ あああっ！」

喉を仰け反らせて、マサトの身体が勢い良く浮いた。しかし、タカがすぐさまマサトの肩をベッドに押さえつける。マサトはその細い身体から出るとは思えないような力で、身を捩じらせていた。

一通り消毒を終えると、ヒロミは開いてしまつている傷口を縫い合わせた。その間にも、マサトの悲鳴は止むことがなく、全てが終わった時には、息を荒くして、胸を上下させていた。

「マサト お疲れ様」

ヒロミの声に答える力もなく、全身を包帯で包まれたマサトは口を開じたままぐつたりしていた。

すでにコロニーに入つてから、約一時間が経過しようとしていた。

シゲはマサトの隣に寝るウサを見つめた。

「ウサは？」

「ウサはマサト先に手当したの。火傷も裂傷もそんなに多くはないんだけど、足と肋骨が骨折して、頭を強く打つたみたい。スキンがないから詳しいことはわからないけど、意識がないのは頭を打つたせいかも」

ウサは眉間に皺を寄せ、そのまま眠り続けていた。

「一度も意識は戻らないの？」

「たまに、たまに、たまに、タカの名前を呼んだり、痛いって繰り返すわ」

「タカが傍にいても反応はないの？」

「うん。目が開けられないからみたいだから。きっとかなりの痛みなのよ」

マサトとウサを交互に見た。マサトも口を開かずて、荒い呼吸の間に唸つたりしていた。

「マサトに鎮痛剤は？」

「それは注射した。けど、効かないみたい。本当は麻酔を打つてあげたいんだけど」

その時、クボが医務室に入ってきた。

「シゲ。どこからかわからないんだけど、交信に反応があった。誰かがエウロパに近づいてるみたいなんだ」

「わかった。通信室に行く。ヒロミ、マサトとウサを頼む。タカも通信室に来てくれ」

タカはウサの手を一度強く握つてそつと離すと、包帯の巻かれた頭を撫でてベッドから離れた。隣ではマサトが歯を食いしばって、痛みをこらえていた。身体中に巻かれた包帯に、赤い色が滲んでいた。

「シゲ 役立てなくてごめん」

マサトが、少しだけ身体を起こしてシゲに話しかけた。大腿部の血液の染みが見る見る広がる。シゲはゆっくり身体をベッドに横たえた。

「お前は、身体を休ませておけ。麻酔なしの治療で体力を使い果たしたんだから。タカ！ クボ！ 急いで通信室に戻ろう。通り過ぎてしまわないうちに、ここにいることをアピールしなくちゃ」

三人は走つて通信室に向かった。

「シゲ　二人の様子は？」

ウサとマサトの様子を見ていないクボは、通信室に向かう途中でシゲに二人の様子を聞いた。

「マサトは消毒と縫合を終えたけど、麻酔をしないで手術をしたら全身の痛みに耐える。ウサは、眠つたままだ。骨折、火傷、それに頭を強く打つたらしい」

「二人はシャトル内のどこにいたの？」

「あ、聞いてない。タカ聞いたか？」

「ああ。マサトの話だと、ウサはコントロールルームにいる時に地震にあつて。シャトルが滑り出したから、慌ててコントロールルームを出ようとしたんじゃないかって。コントロールルームの扉の外に倒れていたそうだ。マサトは、後方の動力室にいたんだけど、前方の爆発の衝撃で動力室も小爆発を起こしたらしい。なんとか動力室から出て、ウサのいるコントロールルームに向かつたそうなんだ。途中の廊下は炎上していた箇所もあつたらしいんだが、廊下に倒れてるウサを抱えて、炎の中を後方に向かつてる時に、俺たちと会つたって」

「　　そうか　　。で、今シャトルは？」

シゲが、通信室の扉を開けながらタカと顔を見合わせた。

「クレーターに落下したよ。もう、シャトルは使えない」

クボは一層落胆した表情をして、通信室に入つた。シゲとタカも後に続く。

「じゃ、交信を続けてくれ。一体どんな反応があつたんだ？」

席についたクボは、説明書のファイルを開けて、キーボードに手を置いた。

「かすかに音が入つたんだ。こちらから呼びかけても反応はしないんだけど、向こうから何か呼びかけているような音がするんだ」

クボはスピーカーの音量を上げて、耳を傾けた。

スピーカーからは、雜音とともに人間の声らしきものが入つてくる。途切れ途切れのその音は、徐々に鮮明なものになつた。

『 シゲ の通信を れんら 』

途切れながらも、聞き取れた箇所だけで、自分たちを探しに来たのだとわかつた。シゲは更に一步前に出て、クボの操作するモニタに顔を近づけた。

「何とか向こうにこちらの声を伝えられないか？」

「ウサさえいれば あの子には不可能がないのに 」

クボは、何度もマイクに向かつて姿見えぬ者に向かつて呼びかけた。

「こちら、エウロパ。こちらエウロパ。応答願います」

『 こちら 救助にむ る そち の声は聞こえている』
シゲは通信室の正面にある大きな窓から外を見た。大きな木星の横に小さく光る物体が近づいてきた。

「タ力 見えるか？ あの光つてる 」

「ああ。この交信相手だろうな 」

確実にこちらに向かつてくる物体は、次第に輪郭を現した。

「あれは、地球からのシャトルじゃないか 」

「僕らの通信が途切れて、すぐに飛び立つてくれたのかな 」

シゲたちのシャトルが着陸した地点から少し離れた広大な敷地に、地球からの救助のシャトルは止まつた。扉が開き、船外服を着た者が四人降りて、こちらのビルに近づいてきた。

「タ力、下まで迎えに行こう。クボは医務室で待つてくれ」
シゲは、タ力を連れてコロニーの入り口に向かつた。

「皆は無事なのか？ 君らのシャトルがないが 」

「 四人の中の老人が口を開いた。 」

「 はい。今のところ、全員生存はしていますが 」

シゲは言葉を濁して、救助に来た四人を医務室に案内した。医務室に向かう途中、シャトルの発射事故の原因を聞いてみたが、老人が出発したときは、まだ何も解明されていなかつたということだった。

四人が医務室内に入ると、クボとヒロミの顔に笑みが戻った。

「私たち助かるのね！」

喜びを隠せないクボとヒロミに対して、救助に来た老人はマサトとウサを見て暗い表情に変わつた。

「この一人の容態は？」

「マサトは、火傷、裂傷、骨折。出血が多くて危険な状態です。ウサは、火傷、裂傷は軽いのですが、頭を強く打つたらしく意識が朦朧とした状態が続いています」

「もしかしたらと思つて、医者を連れてきたよ。ナオ、判断してくれ」

ナオと呼ばれた青年医師と一緒に来た青年一人が、ウサに近づいて包帯を解き始めた。

その時、沢山の人の気配に気がついたのか、マサトが目を開けた。そして、目の前に立つ老人を凝視した。

「ああの時の」

「そうか覚えてあるか。五年前、一回会つてあるの」

「ええ」

マサトは、記憶を蘇らせた。冷凍後四十年経つてるとか、ユウジは死んでしまつたと伝えに来た、白衣の老人。忘れもしない、その老人の顔。

「わしの名前を、あの時は伝えなかつたな。わしはシユウじや全員が老人の顔を見た。シユウといえば、シャトル内でマサトに聞いた名である。マサトと四十五年前にチームを組んでいた人物。

シユウはアングラから去つたつて

全員の疑問が通じたかのように、シユウ老人はニッと笑つてマサトを見た。

「シユウはアングラから去つた、とわしは言つたかな。本当はずつと東棟にいたんじや。マサトが冷凍保存されてから、冷凍保存の研究に身を費やしていたのだよ」

マサトが上半身を少し起こして、シユウ老人に近づいた。

「本当に、本当に、シユウ？」

「驚くのも無理ないな。あの頃は一十八歳だった。わしは今七十三歳じや。そうじや。ナオがマサトとウサの様子を見ている間に、昔話でもするかな？ それに、伝えねばならぬこともある」

その時、ナオがシユウ老人に椅子を勧めた。シユウはゆっくりと腰を下ろし、視線をマサトに合わせた。

「マサト。影で調べておつたようじやが、コウジの死の真相を知りたいんじやろ？ シゲも知りたかろう

シゲもマサトのベッドの端に腰を下ろし、シユウ老人の話を聞いていた。

「それから、地球に帰つてきてからお願いしようかと思つていたことがあるのだが、ここで、お願いすることになるかもしけんのう

「

マサトは、ナオに身体中の傷を確認されながら、シユウ老人の言葉に耳を傾けていた。

「どこから話せばいいかのう。四十五年前、マサトを冷凍保存すると聞いた時は本当に驚いた。そんな技術が完成しているなんて知らなかつたからのう。ま、当時も今もテスト段階ではあるが、第一被験者が生還して来たのじや。この技術は完成したと言つても過言ではなかるう」

シユウ老人は一息ついて、マサトの顔を眺めた。

「マサトは当時と何も変わらないなあ。しかし、マサトが寝ている

間に、わしとユウジは変わったよ。地球上に帰ってきてから、冷凍保存を知っている者として、東棟に移された。他の研究員たちに情報が漏れないようにという配慮だったのじゃろつ。そして、冷凍保存の研究チームに入ったのじゃ。わしは、素直に喜んだ。幹部のみが入れる東棟に入れたのだからな。しかし、ユウジは違つておつた。人間の冷凍保存に反対だったんじゃ」

「シユウは、冷凍保存に賛成なのか？」

「マサトは、目を細めて小さな声で聞いた。

「もちろんじや。研究者として人間の命を操作できるなんて、こんな嬉しいことはない。このアングラにいる者は皆そうだと思つておつたのだが。しかし、ユウジはマサトの冷凍保存の件もあつてか、ずっと反対していたよ。研究に携りながら反対しているんだからな。『冷凍される者の気持ちも考えてくれ』とか『早く、マサトを連れて帰りたい』っていうのがユウジの口癖じゃつた」

「僕も反対です」

「そう口を挟んだのは、シゲだつた。

「人間は、自然の時の流れの中で生きるからこそ、一生懸命生きているんです。他人の力で冷凍されて時を止められ、そしてまた他人の力で知らない世界に放り込まれて。そんな冷凍された人間のことを考えていないシステムなんて」

「ほう。やっぱりユウジの息子じやなあ。ユウジもそんなことを言つていたよ。マサトには自分の意思で生きてもらいたい。知的財産のために、知らない世界にひとりぼっちで目覚めさせるのは、あまりにも可哀想すぎるとな」

シユウ老人とシゲとのやりとりを、マサトは目を閉じて聞いていた。

「しかしながら、シゲ。わしも研究に携つてわかつしたことなのだが、この人間の冷凍保存のシステムは、知的財産を守るために開発された訳ではないのだ。もともと、病人の輸送用に開発が始められたのじや。

まだ、エウロパの開発が始まつたばかりの頃、エウロパで重体の怪我人、病人が出た時に、エウロパでは納得のいく治療が出来なかつたんじや。かといって、地球に帰る体力も残つていない。そんな重体の人間を、息のある状態で冷凍して地球に輸送し、地球で解凍して治療をする そんな目的で、開発が始まつたんじや。

しかし、完成間近になつて、東棟の幹部たちは別のことを考えた。冷凍保存を利用すれば、今までは時の流れの中で失くしてしまつた、優秀な技術者、研究者たちを、いつまでもこのアングラに残す事ができると考えたのじや。そんな時、当時知的財産と言われたマサトがウイルスに感染した。冷凍保存の機械はすでに完成もしており、あとはテストを残すのみだつた。そこで、マサトは第一被験者となつたのだよ。冷凍保存された人間を、輸送する技術がまだ開発されていないから、当初の目的 重体人の輸送は果たされてはいなが、知的財産を残すことには成功した」

「え？ ジゃあ、俺はどうやつて地球に帰つたんだ？ 冷凍保存のまま輸送する技術はまだ完成していないのか？」

「輸送用保存器の試作機を一機だけ作つたんじや。それをこのエウロパに持つてきて、マサトを移し、地球に帰還させたんじや。その後、輸送用の保存器には致命的な設計ミスがあることが解つてな。マサトが戻つて来られたのは、奇跡じやよ」

誰もが押し黙つて、シユウ老人の話を聞いていた。このアングラの裏側で行われている研究。それは、人間の尊厳を無視したような研究だつた。しかし、マサトは冷凍保存されなければ、確實に四十五年前にこのエウロパで命を失つていたのだ。反対すれば、マサトの存在を否定する。賛成すれば、マサトの苦悩を理解してやれない。そんな狭間で全員が口を固く閉じていた。

マサトは、新しく包帯を巻きなおされた胸に手を当てた。

「ユウジは？ ユウジは何で死んだ？」

「ここまで聞いてもわからんのか？ あんまり冷凍保存に反対する

から、殺されたんじゃ。一緒に事故にあつた二人も、冷凍保存の研究職にありながら強く反対していた者なんじゃ。表向きには発表されていないが、今アングラでは、ガニメデやエウロパの開発よりも、冷凍保存の研究に力を入れておる。事故にあつたユウジたち三人は、完成した冷凍保存器を壊そうとしたのじゃ。危険分子として東棟から追い出された三人は、ガニメデの開発に移された。そして他言されては困ると、永久に口を封じた

何の感慨もなく淡々と話すシユウ老人の言葉に、シゲは顔を高潮させた。「誰がそんなことを」と咳きながら立ち上がり、胸倉を掴もうとした瞬間、目の前からシユウ老人が消えた。

シゲよりも早く、タカがシユウ老人を殴り倒していた。

「どうして！ どうして、そんなことが言えるんだ！ 仲間が冷凍保存されて、冷凍保存に反対した仲間は殺されて！ 二人ともお前の仲間だつたんだろう？ それでも研究第一なのかよ！」

「老人を殴るとは、ひどいのう。 わしは研究第一じゃ。仲間を犠牲にしてでも、未来のために完成させなくてはいけないものがある。未来の沢山の命を救うことになるのじゃ、この研究は」

よろよろと立ち上がりナオの肩を借りて、再び椅子に座った。

シゲは、タカの突然の行動に驚いて、シユウ老人を殴ろうとした思いがどこかへ拡散されてしまった。

「タカ

「シゲが手を汚すことはない。こんな奴。仲間を何とも思わない奴研究者の風上にも置けない」

タカは殴った拳を解くことなく、握り締めて震えていた。

「さて、ナオ。二人の様子はどうじゃ？」

タカは、尚飄々とするシユウに更に殴りかかるうとした。が、クボがそれを押さえていた。

「耐えられそうにありません」

「何がだ？」

マサトは不安そうに、自分から手を離したナオを見た。

「それでは、ここでお願いしようつかの。もともと、ウサは意識がないからお願いも何もないがな」

シュウ老人はゆっくりと立ち上がり、マサトの顔の近くに歩み寄つた。

「本来なら、地球での予定だったのじやが

」

そう言つて、一呼吸置いた。マサトの表情にやがて不安が広がる。

「マサトをもう一度冷凍保存する

「マサトをもう一度冷凍保存する」

「え？」

全員の動きが止まった。

「先ほど話したように、本格的に知的財産の保存に冷凍保存を利用したいのじゃ。本来なら、今回のプロジェクトが終了したら、地球で冷凍保存する予定だつたのじゃが、このよつた事故に遭つてしまつた。今、ナオが調べたところによると、一人とも地球に戻るには、体力が持たなくて危険とのことじや。だから、一人にはここで眠つてもらう。地球へ輸送することは出来ないので、解凍はこのエウロパが開発を完了した時になるかの。エウロパで治療が出来る状態になつたら解凍しよう」

シユウ老人は軽く言つてのけ、ナオが注射器を持つて近づいてきた。

「えつ やつやめてよ！ どうして？ 僕の能力が何だつて言うんだ。エウロパでウイルスに感染したのも、ここで事故に遭つたのも俺の運命なんだ！ どうして、好きに生きさせてくれない！ また、何十年か眠らせるつもりなのか？ また俺を知らない世界で一人ぼっちにする気かよ！」

マサトは、シユウ老人に掴みかからんばかりに抗議した。自然と、瞳から涙が溢れ出す。

「マサトの思考能力、技術。すべてがこのアングラに永久的に必要なじや。それに 安心せい。ウサもここで眠るし、シゲ、タ力にも地球で眠つてもらひ予定じや」

「何つ！ 僕たちも？」

シゲは思わず一步下がり、後ろにいたクボにぶつかった。

「大したことではないわ。眠つて目覚めたら数十年経つてたというだけじゃ。身体に影響が出ることもない。すでにマサトで実証済みだからな。さてマサト。お前をこのまま見殺しにはできんのじゃよ。ウサと共に、ここで眠れ」

「嫌だ！ 頼む。もうほつといてくれ！ ウサにも俺と同じ思いをさせたくない！」

「見る。ウサは一生懸命生きようがんばつてているのだぞ。再び、仲間達の顔を見るために、生きようと必死に頑張つておる。そんなウサの思いは、何とも思わんのか？」

横を見ると、苦痛に小さく唸りながらも、呼吸を繰り返すウサの姿があつた。タカは、ウサの手を握り締めて唇を噛み締めていた。

「自分勝手なことばかりいうお前のことは許せないが、今はマサトとウサをここで冷凍保存させて、僕とタカが地球で冷凍保存されるのが一番賢明だと思う。しかし、条件がある。僕たち四人を同時に解凍し、その後はこのアングラから出て行く。解凍後リハビリしている間だけは、知的財産としての仕事をこのアングラでしよう。しかし、その後の僕たちには構わないで欲しい」

シゲは、俯いたままシユウ老人に提案した。誰も傷つけず、誰も悲しまない方法。冷凍保存される者にとつて最大の悲劇は、知る人のいない世界に投げ出され、一から人生を歩まなくてはいけない事である。

しかし、四人同時に冷凍保存され、同じ時に解凍されれば、その悲劇は少なくとも軽減される。そして再びこのような悲劇を起こさないために、四人ともこのアングラから出て行くのが一番いいように思えた。このアングラに冷凍保存の技術がある限り、他の誰かがこの悲劇を体験するのだろうが。

「ふむ。残念だが その条件を飲むとしよう。わしとて、人の命を大切に思つておる。四人同時に解凍させるのは、自然の時間の

中で生きるクボとヒロミに任せるとしよう。それなら安心じやろ？
マサトとウサを、このまま見殺しにはしたくないからな。マ

サト、今のシゲの条件を聞いておつたか？」

マサトは、力なく天井の一点を見つめていた。

「マサト？ マサト聞いてるか？」

マサトは、目を閉じて小さく呟いた。

「シゲ これが 僕の運命なんすね。前の冷凍保存の時も、ユウジに説得された。僕の人生は、シゲの中を流れる血に翻弄されてる。でも、シゲもユウジも大好きだから それでも構わない。今度はシゲも一緒に、次の世界に行けるし」

マサトの脳裏には、ユウジの姿があった。ガラスを隔てて、「生きてくれ」と何度も言つたユウジの姿。必ず迎えに行くという約束は、アングラの陰謀で果たされなかつた。目覚めたときの環境の違いに驚き、世代の違う人間の中で生きて行く違和感。迎えに来てくれるといった仲間の死の悲しみ、知る者の居ない世界での生活の苦しみの中で、シゲやこの仲間たちと過ごしていくうちに次第に新しい世界に慣れた。この世界の人間として生きて行くことに、樂しみを覚えた今、またあんな悲しみを味わうのは嫌だつたが、今度は違う。今度こそ、シゲは迎えに来てくれる。地球で解凍されて今の姿のまま、このエウロパまで迎えに来てくれる。クボとヒロミが、確実にシゲとタ力を解凍して、皆で迎えに来ると信じられる。きっと。

小さく口を結んで、目を開いた。軽く眉間に皺を寄せて、小さく笑つた。

「わかった。また、眠ることにしよう。必ず、四人同時に解凍してくれ。もし、守られなかつたときは

「わかつてある。約束は必ず、クボとヒロミが守ってくれるじゃろう。わしは、もう先が長くないからなあ」

ふつふつふ、と小さく笑つて、視線をナオに移した。

「では、準備をしようかの。ナオ頼む」

ナオはマサトの腕を掴んで肘の辺りの包帯を解いた。

「この注射には、冷凍中に血液が固まらないようにする薬と、睡眠作用のある薬が入っています。前回の時は違つ注射になりますが、心配はいりません。血液中を薬が回りだすと、すぐに眠くなります。何か話したいことがあれば、今のうちに」

そういうて、一旦マサトから離れた。ウサに近づき、肘の裏側に注射の針をあてがつた。タカは、ウサの手を握り締めたまま、注射の液がウサに流れ込むのを見つめていた。

「必ず迎えに来るから。元気になつたら、また一緒に美味しい物を食べに行こう。必ず　必ず」

言葉を詰まらせベッドに顔を伏せるタカの肩を、クボが後ろから抱きしめた。

「俺が、お前らを絶対目覚めさせるから　っ！」

タカとクボが、ウサの呼吸が静かになつたのを見守つていた頃、マサトは何も言わずに、シゲとヒロミを見つめていた。ヒロミは、ボロボロと涙を零して、マサトの手を握つていた。

「マサト、私、絶対死なないから。マサトを解凍するまで、絶対生える。そして、シゲと迎えに来るから。今度はきっと悲しい思いをさせない！」

マサトは頷いて、口を開いたシゲを見つめた。

「親父が守れなかつた約束。僕が必ず守るから。安心して眠つてくれ」

「次の世界では、自由に生きる。自然の時間の中で生きれるんだよね？　精一杯生きて、自然の時の流れに身を委ねたい」
マサトは、ヒロミの手をそつと離してナオの方を向いた。

「お願いします」

注射の針がそつとマサトに近づき、針の先がマサトの腕に埋まつた。

「シゲ 待つてる 待つてるから 「

ゆつくりと目を閉じて、呼吸が緩やかになった。閉じた瞳から、一筋涙が落ちていった。

シゲは低いモーター音と共に白くなつていいく一本の円柱を、黙つて見つめていた。二度と会えない訳ではない。これは、マサトとウサを生かすための判断だったのだ。

悔いはない。

そう思つても、マサトの最後の涙が忘れられなかつた。

信じていた仲間に裏切られた約束。同じ血が流れる者と再び結んだ約束。マサトの中には不安がなかつたとは言い切れない。

しかし、絶対守る。今度は解凍してくれる仲間もいる。目覚めたとき、マサトに笑顔が戻りますように。それだけを、シゲは願つていた。

シュウ老人の乗つてきたシャトルで地球に帰還したシゲ、タ力、クボ、ヒロミは、冷凍保存の日を一週間後と定め、それまで自由時間を使ふこととなつた。

タ力は、ウサの思い出を辿るように、北棟の研究室へと足を向けた。目的地はもちろん、ウサの入り浸つっていたビルのいる研究室である。ノックをすると、すぐにヒルの返事が帰つてきた。間もなく、扉が開けられ、ヒルが顔を出した。

「やあ、タ力。おかえり。どうしたんだい？ ウサも一緒にやないなんて珍しいじゃないか。ま、入れよ」

中に入ると、入れたてのコーヒーの香りがしていた。いい香りのコーヒーをもらい、無造作に置かれた椅子の一つに腰をかけた。研究室にはヒルしかいなかつた。いつもなら、コウセイも共に研究を進めている。

「今日は、ユウセイはいないんですか？」

ヒルは、少し驚いたように手を止め、自嘲的に笑いながら「コーヒーに手を伸ばした。

「何も聞いていないのか」

ヒルはそう言つと一口コーヒーを口に含み、暫く口の中で味わうようにしてゆっくりと飲み下した。それは、次の言葉を考えているようでもあった。

「ん。ユウセイはいなくなつたよ。昨日 だつたかな。君たちが戻るという噂を聞いたとたん姿を消したよ」

「え？ どうして？」

「つまり 簡単に言つと、奴が犯人だつたのかな。今では何も解らないけど。ま、簡単に言えば妬みかなあ？ いや、優しさかな？ 君たちの誰かが知的財産として扱われるという話が広がつて、そんな優遇される者を妬む人間はここにいっぱい居ると思うよ」

「知的財産になつたつて、何一ついいことはないですよ」

「ひょつとして、ウサはエウロパ？」

感の鋭いヒルは少し間を置いてそう言つたが、タ力は表情を動かさなかつた。

「ま、僕は興味ないけどね。でも、ウサに会えないのは残念だ」

「ユウセイが本当に犯人なんですか？」

「さあね。まだこのチームも、手がかりは掴んでないんじやないな。誰が犯人かなんて、犯人以外にはわからないし、犯人探しもないかもしれないね。 そうだね。単に、僕はユウセイが犯人である確率が高いな、と思つただけだから」

ヒルは小さく笑つてコーヒーを口に運んだ。

「どうしてそう思つんです？」

「ん。長く一緒にこの研究室に居たからね。何となく。それに、最後にウサがここに来たとき、シャトルに乗らないでこの研究室に来ないかつて誘つてた。ユウセイが最後の手を差し伸べたんだろう

ね

「最後の手 ？」

タカは首を三十度ほど右に曲げた。

「いや。推測でそんなことを言っちゃいけないか。ひょっとしたら、僕が犯人かもしないしね。ガニメデ行きを何度も志願しても、年齢制限で連れて行ってもらえなかつたから。若い者ばかりが集まつた今回のシャトルの乗務員を恨んでたとか」

軽く言つてのけ、ニコニコ笑つていた。

「ヒルさん シャトルに乗りたかつたの？」

「いや。ここで乗りましたかつたなんて言つたら、タカは僕を疑っちゃうでしょ？」

「う ん？」

「他の可能性もあるよ。東棟の幹部が事故を起させたのかも。コントロールセンターには異常がなかつたつていう話だけど、ひょつとしたらアングラグるみで君たちを殺したかつたとか」

タカは、背筋に寒気を感じた。有り得るのだろうか？

「そんな どうして？」

「ん 。解らない。あそこは何をしてるか解らないからね。動機を聞いてもピンと来ないような理由かもよ」

「怖いなあ。ここで安心して仕事できないよ。それに俺これから

」

冷凍保存になるのに、という言葉は飲み込んだ。決して他人に話すようなヒルではないが、今は何も言わずに消えたほうがいいように思えた。

「ユウセイのいるところを知らないですか？ 一番、何かを知つていいですかね？ あいつの居る所へ連れて行つてください。」

「うん、大体検討が付くから。連れて行つても構わないよ。今日の十九時にロビーで待つてて。一緒に行こう。あ、そうだ。これを持って行って」

ヒルは、机の下に置いてある半透明のプラスチックのケースから、

一着の恒温服を取り出した。

「ウサに頼まれて、新しく開発した恒温服だ。頭部の湿度調節まで出来るタイプだよ」

「湿度？ そんなに、湿度が上がるまで、これを着て外出しちゃまずいでしょ？」

「僕もそう言つたんだけどね。ウサは、外で遊びたいんだつてさ。あの年で、可愛いつていうか、バカつていうか」

タ力はお礼をいい、部屋を後にした。歩きながら、ウサの頼んでいた恒温服を抱きしめる。地球に帰つてきて、これを着て外を散歩して回りたかったのだろう。よく珍しい形の石を見つけては、タ力の元に持つてきたり、日影に草でも生えていると「勿体無いかな」などと言いながらも引っこ抜いて自室に飾つていた。そんなウサの姿を思い浮かべて、少し胸が苦しくなつた。

軽く頭を振つて、深呼吸を一つする。気持ちを切り替えて、他の犯人と動機の可能性について考えてみた。クボはロビーで寝ている時に、シゲが見知らぬ人を見たと言つていた。しかし、研究員、技術員の多いアングラ内では、見知らぬ人がいても大して不思議ではない。しかし、それが本当だとして、外部から誰かが事故を起こした可能性もある。そうなると犯人は捕まりにくいだろうな、と思つた。ここはやはり、自分たちが戻つてくると聞いた途端、逃げ出したユウセイにいろいろ話が聞きたかった。

十九時まで、まだ三時間ほどあつたので、シゲの部屋に向かつた。

シゲの部屋をノックすると、上半身裸でシゲが顔を出した。

「お？ どうした？ どこか外でゆっくりしてくるんじゃなかつたのか？ ここにいたら、ウサのことばかり考えちまうだろ？」

部屋の中に招きいれながら、床に散らばっているTシャツを着た。

「風呂に入るところだつたのか？」

「いや、風呂は面倒だから、身体を拭いてたところだ」

「何で面倒なんだよ？ シャワーくらい浴びればいいのに」

「だつてここは、空調がいいから汗かかないもん」

苦笑しながらソファに座つたタカは、シゲから冷たい麦茶を受け取つた。

「何か話か？」

「ああ。今、ヒルさんの所に行つてたんだ。何となく足が向いたつていうのかな。ウサと一緒に良くなつてたから。それで、ちょっと情報を仕入れたんだ」

シゲは欠伸をかみ締めながらタカの隣に座つた。

「情報？ あの事故の？」

「ああ。俺たちが帰つてくるのを聞いて、ここから逃げ出した奴がいるんだ。俺たちを殺すのに失敗して、逃げたつてここなのか」

「誰だ？ そんな奴がここに？」

タカはまだ犯人とは確定されていない人間の名前を出していいものか悩んだ。

「犯人とは決まってないんだろ？ それを承知した上で、聞くから

」

「ん。コウセイだ。ウサが入り浸つてた、ヒルがいる研究室に一緒にいた男だ」

「僕、あつたことないなあ」

「理由がわかんないんだ。ウサや俺たちと、殺したくなるほどの接点があつた訳じゃない。だから話を聞きたく、今晚コウセイに会いに行くことにした」

「居場所は解つてるのか？」

「ああ。ヒルが思い当たるところがあるつて

シゲは、暫く黙つて腕を組んだ。

「俺が、事故の前日にロビーで怪しい奴を見たつていいだろ？ あれから、ずっと考えていたんだが、ひょつとしたらクボは知つて

いるんじゃないかなって思つたんだ

「え？ どうして？」

「俺あの時、南棟からロビーに入つて、北棟に行つたんだ。その時に、ロビーでクボが寝てるのを確認したんだけど。それで、北棟からロビーに戻つてきたときに、ちょっと争つような小さな話し声がしたんだ。ロビーのソファはパーティションで区切られてるだろ？ 誰かは見えなかつたんだけど、出てくる気配があつたから、思わず近くの受付の下に隠れたんだ」

「で、その時にウサが外から帰つてきたのか？」

「ああ。クボはあの時、起きてたんじゃないかと思うんだ。あの首の受信機は承知の上で埋め込まれていたんじゃないかと

タカは思わず、ソファに座りなおした。

「そんな！ それじゃ、クボが仕組んだつてことかよ？ 仲間がそんなことするはずは っ」

「解つてる！ そんなことは解つてるよ！ でも 」

「クボにはこのことは言わないでくれ。あんなに必死に助かるうと一緒に頑張つた仲間だから。俺は、信じない」

「じつをさまで」と床にグラスと置き、タカは立ち上がつた。気まずい雰囲気の中、タカは静かに部屋を出て行つた。

「 僕だつて信じたくないよ。でも 」

シゲは田を閉じて、事故前日のロビーの様子を、もう一度思い出していた。

タ力は、十九時にロビーへ行くと、既にヒルが待っていた。

「タ力の名前で遮光車を借りてくれないかな？ 僕は、車の扱い荒いから、受付の子たちに嫌われるんだ」

タ力は受付で遮光車の貸出を申請し、ヒルと共に地下駐車場に向かつた。

十五分程走つて、小さなビルの地下駐車場に入った。ヒルは、トランクから荷物を出し、すたすたと扉に向かつて歩き始めた。タ力は慌てて追いかけ、ヒルと共にエレベータに乗つた。

三階で降りると、そこには廊下などはなく、広いフロアが一つあるだけだった。書類棚のようなスチール製の棚がいくつも並ぶ方角に向かつて、ヒルは声を掛けた。

「ユウセイ！ ここにいるんだろう？」

書類棚の向こうから、ユウセイが顔を出した。タ力の顔を見て、一瞬青ざめたようだつた。

「ヒルさん？ どうしてこいつを連れて來たの？」

「来たって言つたから。まずかつた？」

ユウセイは再び姿を消すと、どこかへ逃げ出すような素振りを見せた。タ力は走つてユウセイを追いかけ、床に組み伏せた。

「どうして逃げるんだ？ 何かやましいことでもあるのか？」

「 何もないよ 。 ヒルさん 何で連れてきたんだよ 」

ヒルは、荷物を床に置き、ゆっくりと近づいてきた。

「 ユウセイが突然いなくなつたからね。事故つたシャトルのクルーが帰つてくるつて聞いた途端いなくなつたから、何か知つてるのかと思って。タ力もその事で聞きたいことがあるそうだ」

タ力はユウセイの上に乗つたまま、腕を締め付けるのを緩めた。

「 ユウセイ。知つてゐ事を話してくれ」

「 知らない。何も知らないよ」

「じゃあ、どうしてそんなにタイミング良くアングラから消えたんだ？」

「偶然だよ、偶然」

ヒルは苛立つたように、ユウセイの顔の前にしゃがんだ。

「偶然なものか。いつも言つてたぢゃない。知的財産の人間を冷凍保存する噂は本当だつて。そして、そんなことには反対だつて」

「そんなこと つ

「いつも僕に言つてたぢゃん？ 大っぴらに反対すると殺されるから言えないけどつて。見たんでしょ？ ここに入つてすぐに、ガニメデで人が殺されるのを見ちゃつたつて言つてたよね？ 許せないつて

タカは思わず、ユウセイの上から床に降りて、ヒルの顔を凝視した。

ガニメデで殺された人を見たつて？ それつて

「どういうことだ？ 詳しく教えてくれ！」

青い顔のまま床に座り、ぽつりぽつりと話しだした。

「俺がここに来て間もなく、ガニメデの開発要員としてガニメデに向かつたんだ。ビルを建築する仕事だつた。その時、仕事中だつたにも関わらず全員に休憩の命令が出たんだ。まだそんな時間じやなかつた。しかし、地球から幹部が偵察に来ているとかで、全員現場の事務所に戻るよう言われたんだ。俺も一旦は事務所に戻つたんだけど、現場にタバコを置いてきたのを思い出して、事務所から外に出たんだ。その時、地球から来たという男が五人くらい建設中のビルに登つていった。その後、タバコを取つて、何となく上を眺めながら戻つてたんだ。そしたら、三人の男がビルから落ちてきた。その時、見たんだ。残つた二人が三人の背中を押していったのを。」

その後、上に残つていた男の一人はシユウと呼ばれていることがわかつた。そして死んだ三人は、冷凍保存のプロジェクトの反対派

ということがわかつたんだ。都合の悪い人間を殺してまで勧める冷凍保存のプロジェクトに、俺は反対だった。しかし、殺人現場を見たと言つても証拠はないし、そんなことを声高に叫んだら僕も殺されるだろうからね。だから、今まで黙つていたんだ

「そんな……。シユウガ シゲの親父を殺したつていうのか

タカの小さな咳きは、一人の耳に届かなかつた。小さく息を吐いて、ユウセイに届くくらいの声で聞いた。

「それで？ それで、お前も冷凍保存に反対だが、声高に叫ぶと殺されるからつて、俺たちを殺してアピールしようとでもしたのか？」

ユウセイは青い顔のまま強く首を振つた。

「違う！ 殺そうとしたんじやない！ 殺したいわけじやないんだ！ 辛く長い人生を送るよりは、今ここで事故に遭つた方が幸せなんじやないかつて……。ここにいつまでも縛られて、親しい人の居ない世界に何度も目覚めるよりも、事故に遭つたほうがいいんじやないかつて……。ウサが知的財産になるつて聞いたから……。冷凍保存になんてさせたくなかつた

」

ユウセイは、自分のしたことは決して悪いことではないと信じているように叫んだ。ヒルは、感情を押し殺したまま、冷たい声でユウセイに話しかけた。

「ユウセイの冷凍保存の反対理由は何だつた？ 人間の手で、人間の人生を操るなんてモラルに反してゐるつて言つてたでしょ？ でも、ユウセイのやつてることはそれと何ら変わらないことだよ。そんなことでウサをあんな危険な事故に遭わせたのか？」

ユウセイは、床に頭をつけてただ首を振つていた。ヒルは、そのまま胡坐で床に座り、更に続けた。

「大体、ユウセイが言つてた知的財産者の冷凍保存だつて、ただの噂だろ？」

ユウセイが答えない代わりに、タカが小さな声で答えた。

「いや、本当だ。知的財産者を冷凍保存する技術がここにある」

ユウセイは青い顔を持ち上げ、ヒルはタカの言葉を小さく口の中

で復唱していよいよだつた。

「 え？ 冷凍保存の技術がここにあるつて？」

「 ああ。マサトとウサは、負傷して帰つてきることになつてゐるが、本当はエウロパで冷凍保存されてゐる。向こうで負傷して、地球に戻る体力がないから、仕方なく 」

タカは、マサトとウサの眠る顔を思い出し、一時目を閉じて深く呼吸をした。胸の奥から込み上げてくる何かを飲み込み堪えて続けた。

「 マサトもウサも、エウロパで眠つてゐるんだ。ユウセイ。お前のやつたことは、理由がどうであれ、許せないことだ。俺も冷凍保存には反対だ。しかし、反対だからといって、冷凍保存になる人間を殺していい理由にはならないだろう？ それがその人間のためだと言つても、決して認められることではない。確かに今回、マサトとウサも冷凍保存で眠るよりは、このまま自然の時間の中で命が消えて行くほうが幸せなのかもしれないとも思つた。しかし、それは俺たちの決めることじやない。今回の冷凍保存は 治療のための冷凍保存だ。決して知的財産を守るための冷凍保存じやない。だから、俺たちはマサトとウサを 置いてきた 」

最後の一言を搾り出すように言つたタカは、そのまま黙り込んでしまつた。

そのまま暫く三人は黙つたまま座つていた。窓の外では、風が吹き荒れ、砂埃が窓に打ち付けられていた。一際大きな音がした時、それがきつかけかのように、ユウセイが語りだした。

「 僕はただ、冷凍保存を反対しただけだ。それで、仲の良いクボに話をしてみた。一緒に飛ぶ仲間が冷凍保存になるかもしれないと聞いて、心底驚いていたよ。それで提案したんだ。シャトルが事故に遭つて、冷凍保存になる人間が消えれば、冷凍保存は実行されないつて。大切な仲間が、辛い未来を送るのを救えるつて教えたんだ。 」

シャトル打ち上げの一日前にプログラムを書き換えるように言ったんだ。クボは前日の健康診断で不調を訴えれば、補欠クルーが搭乗することになる。そうすれば、クボは事故に巻き込まれない。そして打ち上げ前日に事故を起こすようにしたんだ。

でも、プログラムの書き換えが終わった打ち上げの一日前の午後に、クボは「こんなことやめよう」と言い出したんだ。もう、準備は完了してるので。クボの手で準備をしたのに、そんなことを言うんだ。「最終訓練には俺が出る。書き換えたプログラムは破壊して、正常なプログラムに戻す」なんて言い出したんだ。だから僕は、クボを混乱させた。そんなこと考えられないように。脳を混乱させる電波を発信する機械を、クボに埋め込んだんだ

「ひょっとして、それは事故前日のロビーで？」

タカはシゲの話を思い出していた。クボがロビーで起きていたんじゃないかと言っていた。話し声がしたとも。それは、クボがユウセイと話をしている声だったのだ。

「そう。あそこで寝ているクボを見つけて、プログラムの書き換えが終わったかを確認したんだ。そしたら、そんな事を言い出すから。あの場で、埋め込んだんだ。特殊な器具を使えば、簡単に埋め込めるからね」

タカはポケットに手を入れた。もぞもぞ動かしてから何かを握つて、ポケットから手を出した。指を開くと、クボに埋め込まれていた受信機と、シャトルに設置されていた発信機があつた。

「これだろ？」

「クボは何も言わなかつたのかい？「僕がみんなを殺そうとした」つて？」

無理に笑いながら聞くユウセイに、タカは眉間に皺を寄せて目を細めた。

「ヒルさん。もう帰るつ。こんな奴ともう話なんてしたくない」

タカは立ち上ると、出口に向かって早足で歩き出した。その時、ユウセイが後ろから声を掛けた。

「タカ！ お前も冷凍保存されるんだぞ！」

足を止めたタカは振り返りもせずに答えた。

「知っている。冷凍保存には反対だが、怖くもないし、不安もない。大切な人と一緒に目覚めるために眠るんだ。知的財産なんて関係ない。俺の意思で眠つて、俺の意思で目覚めるんだ。他人にとやかく言われる筋合いはない」

ヒルも立ちあがり、タカについて部屋から出て行つた。

そして、タカはこの件を誰にも告げず、南棟の自室で冷凍保存の日まで静かに暮らした。

冷凍保存当日。シゲとタカは、共に東棟に初めて足を踏み入れた。指示された部屋は、東棟地下五階、一番地下のフロアの一室だった。部屋には、シユウ老人がとクボ、ヒロミが待っていた。

「ここには、三機の保存器がある。そのうちの一機を使って君たちを保存する。解凍時期は今は限定しない。エウロパの開発が完了して、マサトとウサを解凍できるようになつたら、まず地球でお前たち一人を解凍し、エウロパに送ろう。そこで、マサトとウサの解凍に立ち会ってくれ」

シユウ老人はそれだけ言うと、黙つて作業を始めた。保存器の扉を開け、機器の状態をチェックする。その作業を眺めながら、部屋の隅にある無機質な椅子に四人は腰掛けた。

「クボ。この間、コウセイに会つてきた」

タカは、唐突にそれだけ言うと、床を見つめた。クボが驚いて自分が見ているのを感覚で感じた。しかし、それ以上タカは何も言えなかつた。

「全部聞いたんだね。僕には、このままここで生きて、タカたちを目覚めさせる権利なんてないんだ。そう、生きてる権利すらないんだ。やつぱり僕」

「いや。逆だよ。必死になつて俺たちを守つとしてくれたじゃないか」

「でも！ きつかけは僕が作つたんだ！ あの脳に送られてくる電波に耐えられなかつた！」

ヒロミは、オロオロしながらタカとクボを見つめていた。シゲも口をはさむタイミングを見計らつているようだつた。シゲは、タカがコウセイに会いに行くという話を聞いてから、一度も会つていなかつたのである。コウセイと何を話したのかを聞きたいと思つていた。

「タ力。ユウセイと何を話して来たんだ？ あれから、お前は部屋に籠りつ放して」

タ力は黙つて首を振つた。

「タ力 僕が話すよ。僕がもつと早く話すべきだつたんだ。でも、できなかつた。あの場で信用されなくなるのが怖かつたんだ。絶対に、みんなを地球に返さなきやつて、それだけを思つてた」

「どういうことなの？ 解るように説明してよ」

困惑した表情のまま、ヒロミがクボに問い合わせた。

「あのシャトルの事故は、僕が仕掛けたんだ」

「何だつて？」

ヒロミよりも早く、シゲが大声を出した。ヒロミも「えつ？」と口を押さえ、クボを見つめたまま動かない。

「ユウセイに、冷凍保存の話を聞かされたんだ。今回のシャトルに乗るメンバーのうちの何人かが、知的財産保存の目的で、冷凍保存されるつて。冷凍保存されることは辛いことなんだつて、そう言つてた。眠らされて、何十年後の環境のまったく違う、知らない世界で目覚めさせられるつていうんだ。一体誰が冷凍保存の対象者なんかは聞かなかつたけど、それは可哀想なことだと思った。そして、冷凍保存を声高に反対すると殺されるつて言つてた。だから、皆を冷凍保存から救う方法は、シャトルを事故に遭わせて

そこで、口を固く結び手を強く握り締めた。

「発射予定の一日前に、シャトルのプログラムを変更したんだ。コントロールセンターのプログラムの変更は、ユウセイが手配したらいい。でも、プログラムを変更し終わつてから、目が覚めたんだ。僕のやつていたことは間違つていたつて。こんな事が冷凍保存者を救つたことにはならないつてね。だから、最終訓練の直前にプログラムを破壊して、正常に戻そうと思つたんだ。

プログラムを変更し終えてロビーで休んでいた時に、ユウセイが僕の前に現れたんだ。僕は、プログラムを正常に戻すとユウセイに

伝えたんだ。そしたら そんなことはさせないって 脳に電波を送る機械を、僕に埋め込んだんだ

「どうしてそんな 。いくら可哀想だからって 下手したら私たち死んでいたのよ！」

「わかつて！ 馬鹿なことをしたって後で気がついたよ！ でも、話を聞いたときは、冷凍保存にさせちゃいけないって思つたんだ。誰が対象者かは解らなかつたけど、その時にマサトとウサのことを思い出したんだ。

あんなに楽しそうに過ごしてゐるあいつらが、全然知る人のない世界で暮らすことになつたら って。タカたちが死んだ後の世界で、このアングラに技術提供、監修をするためだけに生き続けていかなくてはいけないなんて。可哀想だと思つたんだ

「でもクボは必死に俺たちを助けようとした

タカは顔を上げて保存器を見つめた。準備はほぼ完了しているようだつた。そのまま視線をクボに動かして言つた。

「電波に脳を犯されながらも、必死に抵抗してたんだろ？ 結局はイオ行きのプログラムを作つてしまつたけど。必要以上にプログラムの入力に時間が掛かつて、最後に気絶するまで抵抗してた。最後に言つた言葉はクボ自身の言葉だつたんだろ？」

「最後の言葉？」

そう聞いたのはヒロミだつた。

「倒れる直前、「マサト、頼む」って言つたよな

クボは力なく頷いた。

「クボ、僕はまだクボを信じれるよ。ここに残つて僕たちを目覚めさせてくれ」

シゲはそう言つて立ち上がつた。ゆっくりと扉側に設置される保存器に向かつて進んだ。

「お前が、僕たちの眠りを見守つてくれ

ゆつくりと立ち上がつたクボは、シゲをまっすぐに見据えて、今度は力強く頷いた。

「冷凍保存には反対だけど、今回は四人一緒だ。僕たちが必ず四人を同時に起こすよ。約束する」

タカも立ち上がり、中央の保存器の前に向かって歩いた。

「さて、長い眠りに入りますか」

「タカ、もう一つ聞いておきたいんだが」

シゲは、タカに近づいた。

「ユウセイのところで聞いた話は、それだけか？」

タカは表情を変えずに一時黙った。脳裏に、シゲの姿にそつくりなユウジがシユウ老人にビルから突き落とされる映像が浮かんだ。口を開いて伝えようかと、喉元まで出掛けたが、飲み込んだ。知らない方がいいこともある。遠い過去の話なのだ。ユウジを殺した張本人がここにいるが、老人だ。どの道、あまり長くはないだろう。今、シゲに伝えても混乱させるだけだと考えた。俺たちの冷凍保存はクボとヒロミが守ってくれる。今はそれ以上考えたくなかつた。開いた唇を一度閉じ、別の言葉を発した。

「それだけだよ。あとは何も聞いてない」

シゲは、タカの胸に頭を任せた。

「オヤスミ、タカ」

タカは、シゲの肩に手を置いた。いつも冷静な判断で皆を引っ張ってきたシゲが小さく震えていた。

「オヤスミ」

シゲは俯いたまま離れると、自分の保存器の中に入った。ずっと黙っていたシユウ老人が近づいて、シゲの身体に数本のコードを付け、口にチューブを咥えさせた。

そして、ゆっくりと扉が閉じられた。

ほんの一週間前、共に地球に帰ろうと、一緒に頑張ったシゲが保存器の中で身動き一つ取らずに立っていた。頭と腰を保存器に固定され、動けないのだが、それだけではなかつた。何かを諦めたよう

な少し沈んだ静かな表情で、じつとしていた。

ヒロミは、唇を噛んで瞬きもせずに見つめていた。シャトルの中で動き回るシゲ。エウロパの基地の中で、現実と向き合いながら判断を下したシゲ。上半身裸で、食堂でごはんをかき込むシゲ。色々思い出していいるうちに、涙でシゲがぼやけてきた。手の甲で涙を拭つた時に、既にモーター音が鳴っていることに気がついた。シゲの口につながっているチューブが白くなり、開いていた目が閉じられた。麻酔が掛けられたのだ。程なく、保存器自体も白くなり始めた。シユウ老人は、タ力に近づいた。タ力は、保存器の中に入り、シユウ老人がそばに来るのを待つた。

「ガニメデでの真相。ユウセイに聞きました」

小さな声でつぶやくと、シユウ老人の手が止まつた。

「見ていたものがいたのか。何故、シゲに言わなかつた？」

「過去の話です。今、シゲに伝えてどうなります？俺たちは、マサトとウサを迎えに行くために冷凍保存されるんだ。今はそれしか考えたくないんですね」

シユウ老人は一度視線を下に逸らし、深く息を吸つてから黙つて作業を続けた。タ力もそのまま黙つてされるがままになつてている。準備が完了し、扉に手を掛けた。シゲの保存器の前にいたクボとヒロミが駆け寄ってきた。

「タ力つ！」

「あとはよろしく」

タ力は口からチューブを外すと、二人にゆつくりと頭を下げた。

「タ力」

言葉を失くした一人が、そのままタ力を静かに見つめた。タ力は、頭をあげるとシユウ老人に視線を動かした。手を止めていたシユウ老人が、透明な扉を閉めた。鍵の閉まる音が異様に大きく響いた。

タ力はっこり笑つて「おやすみ」と口を動かした。チューブを再び咥え直し、シユウ老人に向かつて頷いた。

力チツというスイッチの音の後に続く、低いモーター音。これが

ら何十年と響き続けることになる。目覚めるまで響き続けるその音。ちよつと前までは考えられなかつたことに巻き込まれ、動搖する間もなく、振り回された一週間。ヒロミは眠る一人を見つめて、過去を振り返つた。

冷凍保存に反対した者達は、殺され、冷凍保存され、保存器を見つめ続ける。

最初の冷凍保存を余儀なくされたマサト。

そして冷凍保存に魅了され、研究に携つたシユウ。

ユウジが殺される様を見て、冷凍保存に反対し冷凍保存を阻止しようと、私たちを殺そうとしたユウセイ。

そして、私たちは冷凍保存をめぐる永い時間に巻き込まれた。

一度目の冷凍保存となつたマサト。

怪我をして共にエウロパに眠ることになつたウサ。

そして、マサトとウサを迎えて行くために眠ることになつたシゲ、タカ。

その四人を目覚めさせる役目を担つたクボと私。

たつたの一週間で大きく運命が変わつた。いや、用意されていた運命なのだ。阻止しようと周りが動いたばかりに、早く動いてしまつた。シャトルの打ち上げに成功していいたとしても、帰つてきてから、四人は冷凍保存される予定だつたのである。どう足搔いても同じ運命を辿つていたのかと思うと、胸が苦しくなつた。

何も知らずに暮らしていた一週間前までの生活が懐かしく思える。

戻れない時間。

過ぎてゆく時間。

止まらない時間。

人間は、時間を操れない変わりに、人間の中に流れる時間を操つた。

犠牲になつた仲間たち。四人は目覚めたときに、幸せと感じるのだろうか。それとも、後悔するのだろうか。

ゆつくり選択することもなく、停止した鼓動たち。

「オヤスミ みんな」

ヒロミは、手を強く握り締めて、小さく呟いた。

暗い暗い

どれくらい時間が経つたのか

紅い紅い

最後に見たのは紅い色

怖い怖い

何も見たくないの

お願い

このまま眠らせて

「ねえー。ここって、これからブレイクする街だつてねー。今なら安く
で来れるけどさー。その内、高くなるよ、きっと。今のうちにここ
に家でも買っちゃおうか?」

「別荘かー。そうだね。リゾート地としてこれから発展しそうだも
んね」

旅行者の若い男女が、新しい綺麗な街の中で、楽しそうに会話を
していた。ここは、木星の衛星であるエウロパ。氷の衛星であった

ことなど考えられないほどに、美しく整えられていた。リゾート地であるこの街は、地球のアンダーグラウンドエイジアによつて開発されていた。

そんな街の中心に建つ大きなビルの地下の一室で、眠りから醒めよつとしている者がいた。

「麻酔が切れたら、目覚めますので。目覚めたら、呼んでください」白衣を着た医師らしき女性が、軽くお辞儀をして部屋から出て行った。室内には、シゲ、タカ、そして眠っているマサトと、ウサ四人がいた。

マサトのベッドの隣には、シゲが座つっていた。シャトルの爆発で作られた傷はそのまで、五十年もの月日が経つたよつには思えなかつた。掛けたシーツから少しほみ出して見える肩には、包帯が巻かれていた。シゲは、規則正しく上下する胸をじつと見つめていた。上下する胸に合わせて、すぐ隣に置いてある機械から電子音が規則正しいリズムで鳴つている。

「マサト。約束通り迎えに来たよ」

シゲの言葉に反応せず、電子音だけがシゲの耳に届いていた。

マサトのベッドから五メートルほど離れた所で、ウサは眠つていた。頭には包帯が巻かれ、ネットで包帯を固定されている。顔や身体の傷は目立たなく、包帯していること以外は、五十年前の元気に走り回つていたウサのままだつた。そんなウサの手を、タカは握り締めていた。小さな声でずっと話しかけていた。

「ヒルさんから預つた新しい恒温服を持って來たよ。地球を出る時にヒルさんに頼んだんでしょう？ 完成していたんだ。今では、あの恒温服を着ても、地球の地上には出れないけどね。それから、ヒロミからプレゼントを預つてきてるよ。箱を開けてないから、何が入っているか解らないけどね。早く目覚めてよ。ウサの笑う顔を早く見せてよ」

ウサの胸も規則正しく上下していた。時折、溜息のよつと長い息を吐いて、瞼を強く閉じたりしていた。

「ウサ……。早くここから出て、どこか遠くで暮らそう。俺たちのことを誰も知らない町で。四人で静かに暮らそう」

「ん ど、こ で?」

「ウサつ?」

タカは立ち上がり、ウサの顔を正面から覗き込んだ。

「ウサ! 解るか? ウサつ!」

ウサは瞳を開けたが、焦点が合っていないようだった。濃い紫色の瞳が、宙を彷徨う。

「タ、カ どこ ?」

掠れた声で、視線を彷徨わせた。よく見ると、左目の色が右目よりも少し薄くなっていた。

「ウサ? ここだ。ここにいる!」

ウサの手をタカの頬に当てた。ウサは自分の手の方角をじっと見つめていた。

「あれ? なんか 変 ?」

タカは、コールスイッチを押して医師を呼んだ。間もなく、医師は部屋に入ってきた。

「ウサが目覚めたんですが、俺が見えないみたいで」

医師は軽く頷くと、瞳にペンライトを当て左右に振った。脳波を測定しているモニタをチェックして、脈拍を測った。一通りチェックすると、タカをウサから少し離れた所に呼んだ。

「爆発に巻き込まれたって言ってたわよね? 左目、少し色が薄いでしょう? 視力を失つてるわ。今の医療なら、見えるようにすることも可能だけど。右目は大丈夫。時間が経てば、視力は戻るはずよ。体調が整つたら、左目をどうするか考えましょ」

ウサには聞こえないように、小さな声でタカに話した。タカは、思いもよらない後遺症を抱えたウサを、黙つて見つめていた。

「先生。マサトも目覚めました」

シゲは、マサトが起き上がるつとするのを手伝っていた。

「 何年、経つた?」

「マサトは、周りの風景を見ながら掠れた声で聞いた。目の前にいるシゲもタカもウサも、表面上は何も変わらないので、時間の経過がわからなかつた。

「五十年だ。半世紀も過ぎちまつた」

シゲは、静かにはつきりと伝えた。

「え？ ねえ、シゲ！ 今の声、シゲでしょ？ 今、何て言った？」

ウサは、近くに来たタカにしがみ付きながら起き上がり、声のする方に顔を向けた。

「ウサ、 僕たちは冷凍保存されたんだ」

「う、そ でしょ？」

「ウサ。 本當だよ。」^{ヒコ}はエウロパ。ウサはシャトルの発射事故の後

「覚えてるよ！ 昨日のことでしょ？ エウロパに着陸して、ウサとマサトがシャトルに残つて 爆発したの。覚えてるもん！」
田を擦りながら、ウサは大きな声を出した。涙を拭こうとしているのか、視力を戻そうとマッサージしているよう^{ヒコ}にも見えた。

「嘘だもん。 そんなに時間進んでないもん」

「本當だよ、ウサ。俺達、爆発に巻き込まれただろ？ 地球に帰る体力が残つてなかつたから、このエウロパで冷凍保存されたんだ」
隣のベッドからマサトがウサに話しかけた。

「タカもシゲも 年寄りなの？ そんな声に聞こえないよ

「俺たちも、地球で冷凍保存されてたんだ」

タカは、まだ目を擦り続けるウサを抱きしめた。

「ウサと、マサトを迎えるために、また一緒に暮らせるよう^{ヒコ}、俺たちも冷凍保存で眠つていたんだ」

「ヒロミは？ クボは？ 皆も一緒？^{ヒコ}でいるの？」

シゲは、タカに向かつて首を振つた。一気に伝えるのは、過酷だとでも言いたかったのだろう。タカは頷いて、「また今度ゆっくり話そう」と言つて、ウサをベッドに横たわらせた。

「誰か嘘だつて言ってよ」

ウサはシーツを被つて、小さく丸まつてしまつた。

「嘘だもん！ 信じないもん！」

一日後。右目の視力が戻つたウサは、鏡の前で時間を過ごすことが多くなつた。リハビリで歩行訓練を終えると、部屋に戻つて鏡の前でじつと自分の顔を眺めていた。

「ウサ？ 昼食の時間だよ。食堂に行こう？」
マサトが、声を掛けても、黙つて首を横に振るだけで、食堂に顔を出すことはなかつた。タカとシゲが部屋に来ると、ベッドに潜り込み、会話もままならない状態だつた。

しかし、その日の夕方。タカがウサとマサトの部屋に来ると、ウサは一人で鏡の前でじつとしていた。

「ウサ？ 食事をしないと駄目だよ？」

ウサはその声が聞こえないと、身動きもせず鏡の中の自分を見つめていた。

「ウサ？」

「ヒロミは？ クボは？ どうして会いに来ないの？」

「ヒロミとクボは ここにはいないよ。一人は冷凍保存にならなかつたんだ。二人共は高齢だから、地球でウサが帰つてくるのを待つてるよ」

ウサは、見えない左目を擦り、右目を閉じた。

「 ねえ、どうしてウサを冷凍保存したの？ ウサは、あの時代に あの地球で生きていきたいのに 」

「 あのままだつたら、ウサもマサトも死んでいたんだ 」

「 そりや、またタカと暮らせるのは嬉しいけど 」

ウサは両目を開けて、鏡に映るタカを見つめた。

「 ウサは、あの時代に生きていたの。あの時の地球に色々残してきただよ。戻りたいよ。やりたいこと一杯あるんだもん。友達も、

宝物も沢山置いてきちゃつたじゃん！」

「ウサ

「やつと、ウサの居場所を見つけたのに！ タカがウサをアングラに連れてきてくれて、ずっとここで生きて行こうって思つてたのに！」

「

「時間がこんなに過ぎたのに、どうして私はこのままなの？？」

大きな瞳を見開いたまま、叫ぶようにウサは言つた。『戻りたいよ』と繰り返し、大きな瞳から大粒の涙がいくつも零れた。

「ごめん ウサ 本当にごめん」

タカは、掛ける言葉を見つけられなくて、項垂れて部屋を出て行つた。

扉が閉まる音がすると、ウサは鏡を強く殴つて粉々に碎いてしまつた。握り締めた拳から、血が滲み出てきた。

大きな音に気づいて、タカが部屋に戻つてきた。

「ウサつ！」

ガラスの欠片の中に手を付いているウサを見て、近くにあつたタオルで傷口を強く縛つた。

「そうだ。ヒロミから預つた物をそこに置いてあるんだ。今、先生を呼んでくるから、治療が済んだら開けてみて」

タカは、ウサを割れた鏡から離して、ベッドに座らせた。

タカが部屋から出て行くと、ウサは部屋の隅に置いてある箱を開けた。中には、黒いノート型のパソコンが入つていた。形だけ見て旧式と解る。二十一世紀初期の形だった。パソコンの上に、ヒロミからのメッセージが一枚乗つていた。

『ウサへ。

これを聞く時は、ウサが目覚めた時だよね。

きっとエウロパは、私たちが着陸した時からは考えられないくらいに発展して、そして私は、お婆ちゃんになつていることでしょう。

生きてるかな？ 生きてるといいな。もう一度、ウサに会いたいもの。

ウサが怪我をして、マサトと一緒にエウロパに残すのを決めた時は、本当に辛かったの。どうしても一緒に地球に戻りたかった。でも、ウサを助けたかったの。だから、エウロパに残すことになったのよ。タカやシゲを怒らないでね。決して安易に決めたわけではないのよ。確かに短い時間で決断しなければいけなかつたけど、最善を尽くしたつもりよ。

同封してあるもの。きっとウサなら一日で解るよね？二十一世紀に普及していたノートパソコンです。研究室のビルさんがね、骨董品屋で見つけてきたの。動かないやつだけど、ウサにあげたいつて。「きっと、ウサの好きなデザインだから。目覚めたら渡して」とて頼まれたの。インテリアとして飾つてもいいけど、きっとウサなら使えるように改良しちゃうでしょ？ 好きなように使ってね。

それから、私からのプレゼントも入れておきます。ウサの部屋にあつた地球の石。それから、シャトルの前で六人で撮つた写真です。自分が冷凍保存になつたなんて、きっと驚いて動搖していると思うけど、ウサなら新しい時代でも生きていいけるよ。シゲも、タカも、マサトも一緒だしね。

アンダーグラウンドハイジアなんかに縛られないで、ウサの思うように自由に生きてね。

追伸 おばあちゃんになつた私を見て笑わないでよね。

一一一五年五月 ヒロミ

涙で文字が震んで見えた。自分が冷凍保存になつたのだということを、認識しなくてはいけない。どんなに耳を塞いでも時間は戻らないのだ。

手首で涙を拭つて、箱の中の物を出した。

ノートパソコンは奥行十五〇ミリ、横一五〇ミリ、厚み十五ミリくらいの大きさで、電源ボタンを押しても反応しなかつた。画面に

紙が貼られており、黒いペンで大きく「ウサちゃんへ。」ついいうの好きでしょ？ ヒルより」と書かれていた。思わず笑みが零れる。ヒルの素つ氣無い感じが溢れていた。今にも、目の前に現れて、「改造手伝おうか？」と言つてきそうである。しかし、五十年もの時が過ぎたのだ。ヒルもきっと生きてはいないだろ？ パソコンを胸に抱きしめて、ヒルの姿を思い描いた。

箱を覗くと、更に下の方に、丸い石が三つあつた。自分の部屋の机の上に飾つてあつた地球の石である。外で遊んでいた時に偶然見つけた丸い石。コンクリートで舗装されている地球上では珍しい石。それも、綺麗な形だつたので、嬉しくて持つて帰つたのだった。

そして、色あせた写真が出てきた。初めてのシャトルの訓練の前にシャトルの前で撮つた写真。そこでは、六人が笑顔で写つっていた。この半年後には、後ろに写つているシャトルで事故に遭い、人生が大きく変わるのである。そんなことは知りもしない過去の自分が、屈託のない笑顔で写つていた。

ウサは、写真を胸のポケットに入れ、パソコンと石と箱に戻した。そして、医師とタカが来る前に、部屋を出た。

マサトは、ビルの屋上でエウロパの街を眺めていた。今、自分の環境が信じられなかつた。マサトが生まれた頃は、人間は地球以外に住む場所はなく、地球上もあんなに灼熱地獄ではなかつた。それもそうだろう。自分の生まれた年から数えると、百十六年も経過したことになる。姿は二十歳代のまま時間だけが過ぎていつた。

さすがに一度目となると、冷凍保存から目覚めた時のショックは小さかつた。いや、一緒に冷凍保存された仲間がいたからだろうか。環境は変わつても、一緒に過ごす仲間が変わらないというのは、それだけでも大きな救いになる。

部屋に残してきたウサのことが気になつた。事故にあつて、気が付いたら五十年も経過していたなんて、確かに信じられないだろう。環境が時間の経過を物語つても、それを受け入れるには時間がかかるのは解る。冷凍保存されたと解つても、抵抗があることなのだ。ウサは冷凍保存を承諾したわけではなかつたのだから。気が付いたら五十年も経過していたなんて、可哀想な運命を背負わせてしまつた。しかしウサは今、一生懸命現実と向き合つている。何とかして、ウサに笑顔を戻してあげたかつた。

丁度その時、ウサが屋上に顔を出した。

「マサト。ここにいたんだ？」

ウサは、ゆっくりとマサトに近づいた。すぐ隣に立つと、胸のポケットから一枚の写真と取り出した。

「見て。昨日のようになつてゐるのに、こんなに写真が色褪せてるの」

ウサから写真を受け取つて、写真に写る六人を見た。遠い過去の自分。そして、今ここにいる自分。自分の中の時間は止まつたまま、周りの時間が過ぎていつたのだと強く実感した。

「これ、どこから？」

「ヒロミが、ウサにプレゼントを用意してくれていたの。ヒルさんから骨董品のパソコンと、ヒロミが、この写真と、ウサの宝物を保管してくれた」

マサトの手から、写真を奪うと、また胸のポケットに戻した。

「ねえ マサトは、冷凍保存で一度も命を救われてるでしょ？」

嬉しい？」

「嬉しいっていう感情はないけど。そうだなあ。今回に関しては、救われたよ。ウサもシゲもタカも一緒にだから」

「そつか」

ウサは、ペタンとコンクリートの上に座つて、ロビーの天井を見上げた。

「変わったね。地球もいっぱい変わってるんだよ、きっと。ウサは何も変わらないのに。こんなことつてあるんだね」

そのまま寝転がつて、仰向けになった。

「ウサね。地球に戻る。ヒロミに会つて。自然の時間の流れの中で生きてきたヒロミとお話しする。クボのことも聞きたい」

「そうだね。みんなで帰ろう。でもその前に、ウサは」

「ウサ！ どうして部屋で待つてなかつたんだ？」

タカが医師を連れて、屋上に上がってきた。

「あの箱開けたの。写真が入つてて。マサトに見せたかったから」

「血は止まつたの？」

駆け寄つて、赤くなつたタオルを外した。

「ほら。まだ血が出てるじやん。治療しなきゃ」

マサトもウサの手を覗き込んだ。

「部屋に戻ろう。ウサの左手のことも話さなきゃ」

マサトはウサの手にタオルを巻きなおすした。タカがウサを抱えて、

階段へ向かう。

「左目」

ウサはベッドの上にまつりと咳きながら、見えない左目だけを開けて右目を閉じた。薄い紫色の瞳がぼんやりと宙を見つめる。そして、ゆっくりと笑つた。

「ウサ。左目の手術のことだけど

「受けない」

綺麗に包帯を巻かれた右手を見つめて、まつきと答えた。

「だつて、見えないんでしょ？」

マサトが隣のベッドから、駆け寄ってきた。

「うん。目の前にあるものは見えないよ」

「じゃあ、どうして？ 生活したり、コンピューター使つたり、両目がないと不便だろ？」

「いいの」

シゲとタカとマサトの三人の説得にも、「受けない」の一点張りで、頑なに首を横に振つていた。

「あのね。左目でしか見えない物があるの。だから、左目はこのままがいい」

そう言つて、右目を開じると、焦点の合わない左目だけを開けて、にっこり笑つた。

「この左目、気に入つたの」

三人は、それ以上は何も言わず、穏やかに笑うウサを見つめている。決して奇妙な微笑みではなく、本当に左目で何かを見ているようだ。やさしく微笑んでいた。

ウサは右目を開けて、タカを見つめた。

「ねえ？ 早く地球に帰ろうよ」

「ウサ？」

「「めんね、タカ。心配かけて。時間が止まつたのはウサだけじゃないもんね。ウサはどの時代に生きててもウサだもん」

「うん」

「一度地球に帰つて、過去にサヨナラしてくる

「そう。そうだね。明日にでも帰ろう。ヒロノも待ってるし

シゲとマサトが頷くのを見ると、タカは「手配しておくれ」と立ち上がった。そして部屋の隅にある大きなダンボールをそばに引き寄せた。

「ウサ。もう一つ渡すものがあるんだ。俺がヒルさんから預つてたんだけど」

そう言いながら、ダンボールを開けた。中には、オレンジ色の服が入つていた。

「お願いしていた、新しい恒温服。もう地球上で使うことはできないだろうけど。『ウサに渡してくれ』ってヒルさんに言われた」ウサは、俯いて恒温服を直視しなかつた。小刻みに首を振つて、手を口元に当てている。

「会いたいよ。ヒルさんに、もう一度会いたい
もう叶わないであろう願いを、ウサは何度も口にした。

「ヒルさん アリガトウ」

左目だけを開けて、遠くを見つめていた。そこへ、ヒルさんがいるかのようだ。

地球上に帰還する四人の目の前に、五十年前とは大きく形の変わったシャトルが目の前にあった。

「これ シャトル？ これ飛ぶの？」

ウサは、何度もシャトルの周りをくるくる歩きながら、シャトルのボディをコツコツ叩いていた。

「こんなに小さいの？ これで、地球まで何日かかるの？」

アンダーグラウンドエイジアの職員が、にっこり微笑んで答えた。

「約一時間半で地球に着きますよ」

「一時間半！ そんなに早いの？」

マサトとウサが声を合わせて驚いた。シゲもタカも地球から同じ

タイプのシャトルに乗ってきたので、もちろん驚きはしなかつた。

「あつという間に着くよ。ワープしているワケではないんだけどね。この数十年で一気に進化したらしいんだ」

シゲは、シャトルの扉を開いてステップを引つ張り出した。最初に中に乗り込んで、上から手を伸ばした。

「ウサ。おいで」

「んっ」

ウサはシゲの手を掴んで、ステップに足を掛けた。シゲが、腕を持ち上げて、ウサを軽々とシャトル内に入れた。

「おおお！」

室内は、ホテルの一室のような作りで、地球～木星衛星間を移動するシャトルには見えなかつた。

「豪華 つ！ すごいねえ。すごおい！」

ウサは、フカフカのソファの上でスプリングの強度を確かめるよう、ピヨコピヨコ上下に動いた。

「俺の生まれた時代からは、全く考えられない世界だなあ」

ゆとりのある椅子に腰掛けたマサトは、シートベルトを腰に巻きつけながら言つた。

「一時間半なんて言わずに、もつと乗つてみたいシャトルだね」

ウサは「うんっ！」と頷いて、マサトの隣の椅子に座つた。マサトがシートベルトを引っ張り出して、ウサを固定した。

「タカー。旅行みたいだね。すごいね」

上を見ると、ウサの座つている背もたれの上にタカが顔を出していた。

「そうだね」

ウサが心から楽しんでいる様子を見て、タカとシゲは顔を見合わ

せて笑つた。地球に帰つてからも「過去にしたくない過去」や、「現実として認めたくない事」が沢山あるだろう。しかし、ウサには前に進んで欲しいのだ。新しい世界で暮らしていかなければならぬ。この生活に興味を持ち、冷凍保存になつたことを忘れるくらいに、楽しく過ごして欲しかつた。

そして、それはもちろん自分に対しても言えることだつた。自分たちも冷凍保存された身なのだ。自分で決めたこととはいえ、まだ現状を認識しきれない部分もある。しかし、今を生きなくてはいけないのだ。過去に囚われても時間は過ぎてゆくものなのだ。

「出発しますよ」

前方から声がする。エンジン音が聞こえ、窓の外の風景が動き出した。

「あまり、外をじつと見ていると、気分が悪くなりますよ。ものすごい速さで、風景が流れますからね」

パイロットがそう言つても、ウサは窓をじつと見つめていた。「すごいね。外に何があるのかわからんないよ。すんごい速いよ！」

タカは、「酔いそう」と言いながら、目を閉じていて。シゲも、「耳が痛いなあ」などと言いながら、マサトにちよつかい出していた。結局、シャトルのスピードに慣れないまま、青い地球が見えてきた。

「地球つて、灼熱になつても青いんだね」

みるみる近づく地球を四人は思い思ひに見ていた。

「ただいま」

ウサの言葉が、タカ、シゲ、マサトの心に浸透していった。

「マサト！ ウサ！ おかえりなさい」

年老いた女性が、シャトルから降りている四人に近づいた。タカ

とシゲは、挨拶をして、管理棟に向かった。マサトとウサは立ち止まり近づいてくる老人を見つめていた。

「 ヒロミ? 」

「 ああ。ウサ。そんな表情しないで。ヒロミだよ。いいなあ。みんなは変わつてなくて 」

ウサは、ヒロミの手を握つた。

「 ヒロミ 　 ただいま。プレゼントももらつたよ。ありがとう 」

「 プрезент? えつと何だつけ? 」

「 写真と、石と、パソコン 」

「 ああ。うんうん。そうだ。そんなものを、箱に詰めた記憶があるなあ。だって、五十年くらい前のことよ。私がこっちに戻つてきて、すぐ詰めたから 」

ヒロミは、マサトの方を見て微笑んだ。

「 一度目の冷凍保存。お疲れ様でした 」

「 ああ。一度目でも慣れないものだな、新しい世界には。驚きっぱなしだよ 」

そう言って、空を見上げた。太陽光を遮断する大きな透明の天井が見えた。他の星同様、地球もロロニー内で暮らすようになったようだ。特別な服を着なくても、地球上を歩けるようになったのだった。

「 クボも中で待つてるわ。マサトとウサに会いたがつてるのよ。元気な二人に会いたいみたい。まだ、罪の意識が消えないようですね。あれから、クボ 変わったわ 」

「 困つたものよ 」とでも言いたげに、首を振つた。三人が管理棟の中に入るとい、タカとシゲ、そしてクボが待つていた。

「 お帰り。マサト、ウサ 」

シゲに右側から支えられながら、クボはマサトに近づいた。マサトの顔を見て、皺の深い顔をくしゃくしゃにした。

「 本当に 何と言つたらいいのか 」

「 クボ 俺たちは、元気に帰ってきた。それだけでいいじゃない 」

か

シゲが、クボの背中をぽんぽんと叩きながら言った。ウサも近づいてきて、左側からクボを支えた。

「ウサね、また皆と暮らしたいの。ね？ 楽しく暮らしたいの！」「ウサ、ごめんね。私たち、もうここでは暮らしていないの。ここに南棟を出て、普通のマンションで暮らしているのよ。あんまりここに来ることはないのよ。だから、ウサたちが遊びに来てね」

「うん」

「今まで、一緒に過ごせなかつた時間を取り戻そう。遊びに行くよ」マサトが言ったその言葉を、クボとヒロミは囁み締めていた。交わることのない五十年の時間を振り返る。

決して戻ることのない時間。
取り戻ることのない時間。

解つてはいても、取り戻せると信じていたかつた。

六人だけの、再会を祝うパーティを開き、全員で記念写真を撮つた。その写真は、一人の老人と、四人の若者が写つていた。

そして、その日以降、六人が集まることはなかつた。

アンダーグラウンドエイジアと、クボに別れを告げて、地球を離れることにした。荷物をまとめて、シゲ、タカ、マサト、ウサの四人は火星行きのシャトルに乗ることにした。

しかしウサが、最後にヒロミの墓に行くと言つ出した。

四人でヒロミの墓の前に立つ。

四人の中では、ついこの間まで同じ時間を生きていたヒロミ。や
んなヒロミが、今は天寿を全うして土の下に眠る。

不思議だった。

理解はしていても、不思議という感情は消えなかつた。

「ヒロミとウサ。どちらが偉せ？」

小さな花をヒロミの墓の前に置き、ウサは誰にとつでもなく問
いかけた。

それは、共に生きる三人に問い合わせたのか。

それとも、土の下のヒロミに問い合わせたのか。
マサトは自分に置き換えて考えてみた。

ヒロミとマサト。どちらが偉せ？

一度も冷凍保存され命拾いしたものの、人の手で歪められた時間
の中で生きたマサト。

反対に、古来からの自然の摂理のままの時間を過ごし生命の火を
燃やし切ったヒロミ。

答えはないのかもしれない。

一つだけいえるとしたら、それは

「偉せかは解らないけど、ヒロミが少しだけ羨ましいかな

」

ヒロミが笑つた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6743a/>

エウロパの時間

2010年10月8日15時46分発行